
Song for Snow

清久 志信

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Song for Snow

【Nコード】

N3645Z

【作者名】

清久 志信

【あらすじ】

ユキとリツ。常に寄り添う二人の絆は、周りが認めるほど確かなものだった。
ゆきと貴久。不倫と取られかねない二人の関係は、とても曖昧で奇妙だった。

過去と現在の二組の男女と、それを取り巻く人々の歌で繋がる絆の物語。

0 Snow Like Ash

空から舞い降りる白いカケラが、指先に触れて雫へと変わる。

眩しくもないのに目を細めて、ゆきは空を見上げた。

暗い色の雲を背景に、純白のはずの雪の華が薄汚れているようにすら見える。それは、花びらというよりも灰と言った方が相応しいように思えた。

いつかも、こんな風に空を見上げたことを思い出す。

その時にはもつと綺麗だったのにと、そう思ってから苦笑が零れた。

それはきつと、一緒に見上げる人の存在があったからなのだと気付いたからだ。

純粹で、ひたむきでいられたあの頃。隣で笑う人の存在が、自身をそうさせていた。

何よりもその人が、雪のように清らかで柔らかで優しかったから。

そして、今の自分自身には『花びら』よりも『灰』の方がぴったりだと思えた。

「ゆき」

記憶に重なる声で呼ばれて、振り返る。しかし、そこに立つのは、その記憶の中にある人とは、全くの別人。

それでも、今この場にこの人がいて、こんな風に呼んでくれることが嬉しいとゆきは思っていた。

「何、見てるんだ？」

「……ゆき」

短い問いに、ゆきは少し考えてから簡潔に答える。

「そのままだな」

呆れたような、困ったような、どっちとも取れる笑顔で貴久は呟いた。それに応えるように、ゆきも口角を僅かに上げる。作り慣れていたその表情には、微かな苦味が自ずと混じった。

「ゆきの笑い方って、『ゆき』みたいだな」

唐突な貴久の評価に、ゆきは思わず小さく笑ってしまった。

「貴久さん、それってどんなの？」

「そのままだよ。触れた瞬間に消えそう」

そう言う貴久の微笑の中に、自分と同質のものを感じ取り、ゆきはもう一度空を見上げた。

きつと、『二人』はよく似ている。

そしてこんな風に雪花の舞う日には、二人揃って笑顔を作るのに苦勞をするのだろう。

「ほら、いつもでもこんなところにいたら風邪ひくぞ」

「うん」

貴久に促され、ゆきはゆるやかに一步を踏み出した。

その頬を、ふわりと生まれたての白雪が撫でてゆく。耳元で、懐かしい音が聴こえた気がした。

思わず足を止め、振り向いてしまう。

「どうした？」

「……ううん、何でもない」

広がる風景の先に、探している人がいるはずはない。

わかつてはいるのに、振り返ってしまった自分自身を嗤うように、ゆきは静かに微笑んだ。

車に向かう二人を包み込むように、白銀の花がどこまでも優しく降り注いでいた。

1 Sepia Daily Life

突然、ギターの色音が止まる。

それにつられるようにベースとドラムも止まり、歌っている最中だったリツも声を途切れさせた。

どうしたのかと誰かが訊ねる前に、ユキの視線がリツへと真っ直ぐに向けられる。

「リツ、今日調子悪い？」

訊いているような口調ではあったが、ユキの表情からは確信しているような色が窺えた。

リツは苦笑で誤魔化そうとしたが、ユキが軽く睨みつけると、それを断念するしかなかった。

「何？ リツちゃん風邪？」

「駄目だろ、無理してちゃ」

ベースのヨシノとドラムのシユウが、揃って心配そうな声を掛けるのに、リツは大丈夫だと首を振る。が、それを見ていたユキに、更にきつく睨まれて首を竦めた。

「大丈夫じゃないでしょ。何年リツと一緒にいると思ってるの？」

いい加減、その下手な嘘が通用するとか思わないで欲しいんだけど」

「けど、熱はもう」

「問答無用。今日はもう終わり。家まで送ってくから」

そう言いながら、ユキはさっさと自分のギターを片付け始めた。た。

こうなってしまったユキは、誰が何と言おうと自分の意見を曲げない。それはメンバー全員の知るところで、今のような状況ならば誰も逆らえるはずがなかった。

何故なら、ユキだけでなくリツの強情さも相当なものだからだ。

ここでユキを止めてしまえば、平気だと主張し続けるリツは倒れるまでやりかねない。

ヨシノは素早くリツの荷物をまとめると、それをユキの方へと差し出した。ユキは荷物を受け取ると、椅子の背もたれに掛けてあったコートをリツに向かって放る。

リツはそれを頭から被るようにして受け取った。

「リツちゃん駄目だよ。リーダーの言うことはちゃんと聞かなきゃね」

「そうそう。ユキ母さんは怒らせると後が怖いぞー」

ヨシノに合わせるようにシユウも続ける。ユキは何食わぬ顔で、自分も上着を着込み、荷物をまとめていた。

「二人してユキの味方がよー」

誰も自分の味方に回ってくれないことに、恨めしげにリツは文句を零す。

その額をこつんと小突き、ユキはリツを促した。

「ほら行くよ、リツ」

「お大事にねー」

「ビタミンCと睡眠とれよー」

「あーい」

ヨシノとシユウに見送られ、リツは半ば引きずられるように貸しスタジオの狭い階段を登る。

外へ出ると、まだ日が暮れる時間でもないのに、少し薄暗かった。見上げれば、ビルの隙間から見える空には濃いグレーの雲が厚くのさばり、太陽の光の多くを遮断していた。

「さむっ」

吹き抜ける朔風に、リツは思わず身を縮める。ハイネックのニットを着ていても、首筋をスカスカと風が通り抜けていくような感じだった。

コートの襟を立てて何とかやり過ぎそうとするリツの首に、ユキは自分のマフラーを掛けてやる。

「バカリツ。風邪ひいてるならマフラーくらいして来なさい」

「馬鹿じゃねえよ。風邪ひいてるもん」

「自己管理の出来てないおバカだから風邪ひくの」

『馬鹿は風邪をひかない』という格言を主張するリツに、ユキは論理的な返答を返した。

しかし、リツはそれを聞いているのかいないのか、ユキを見て微笑かに笑っている。

ユキは呆れて溜め息を洩らす、リツはただ、ユキがいかにもユキらしい答えを返すことが可笑しかっただけだった。

そんな風に笑うリツの目の前に、ひらりと白い物が舞い降りる。

「あ、ゆき……」

「何？」

「ユキじゃなくて、雪！」

ああ、と納得したように、ユキは視線を頭上へと移した。リツも同じく、隣で空を仰ぐ。

暗い灰色の雲を背景に、幾つもの白いカケラが舞っていた。

それはまるで、ビルの高層からばらまかれた紙吹雪のよう。

「あ……、ユキ、ユキ！ 出来たっ！」

「は？」

「ほらほら！ この間ユキが聞かせてくれた新しい曲！ 歌詞出来た！ ってか、出来そう！」

興奮してまくし立てるリツに、ユキは啞然とさせられる。そして、しばらくすると実に大きな溜め息へと変化した。

「リツ、真性馬鹿でしょ」

「何がさ？」

心底呆れきった様子のユキの物言いに、リツは不満も露わに問い返す。

それに対して、ユキは超特大の溜め息をついてから、一息で返答した。

「風邪！ ひいてて練習切り上げたのはどこのどいつー!？」

「このこのいつ」

リツは目の前のユキを指差しながら、しれっとした表情で答えた。

実際、練習を切り上げる指示を出したのはユキなので、リツの言い分は間違っていない。

間違っではないのだが、

「……こんの、世紀末バカっ！」

ユキの怒りに触れないわけがなかった。ピシッとリツの額にデコピンが炸裂する。

あまりの痛みに、リツは額を両手で押さえてその場に蹲った。スタジオで小突かれた物とは比べ物にならなかったようだ。

「くうっ！ ユキ酷い！ 鬼畜！ サド！ オニー！」

「何？ リツ、一回じゃ足りないの？」

涙目で抗議するリツに、ユキはにっこりと笑みを浮かべた。けれど、その目はまったくもって笑っていない。

「いえ、結構です」

これ以上言つと、更なる悲劇が身を襲うだろうことを感じ取り、リツは引き攣りながら笑顔を作つて短く答えた。

心底、リツはユキに逆らえないのだと自覚する。

一方ユキは、反省の色の薄いリツに、何度目かもわからない嘆息を洩らした。

「音楽バカ」

「ユキに言われたくないぞ、ギターバカの作曲バカ」

「歌バカ、作詞バカ」

「バンドバカ」

最後には綺麗に二人の声が重なった。それに顔を見合わせ、堪え切れないように笑い出す。

音楽が好きで、歌うことが好きで、作り出すことが好きで。

そんな大好きなことが目一杯できる、バンドという存在が、大切に愛おしい。

二人にとつて、互いの馬鹿さ加減は理解しやすく、心地良かった。だからこそ、一緒に音楽をやっているのだ。

未だに座り込んでいるリツに、ユキは柔らかな笑みとともに手を

差し出した。

「まったく……。うちで書く？」

「おうっ！」

差し伸べられた手を取って、リツは立ち上がる。そして、その手を繋いだまま、二人は歩き出す。

触れている指先は、外気に晒されて冷たくなっていた。

「駄目だぞ、ユキ。ギターリストなんだからもつと指大切にしないと」

「だったら、リツももう少し喉を労わってね。たまには休めない」と

「歌ってないと、死んじゃうよー」

「バーカ」

口の悪さとは裏腹の笑みを含んだ声音に、自然と零れる笑顔。

いつものやりとりは、どこまでもいつも通りで、そのいつも通りさが嬉しい。

そんな時間と空間は、いつまでも続くと、そう信じて疑いもしない冬の日だった。

#2 Transparent Eyes

「ゆき、どこ行きたい？」

そう訊くと、ゆきは何か言いかけて、すぐにやめる。

いつも同じように何かを答えかけるのだが、数瞬後に返される答えは、きつと最初に言おうとしたものと違うのだろうと貴久は思っていた。

(ゆきの本当に行きたい場所は、どこなんだろうな)

そんなことをぼんやりと思いながら、横目でちらりと助手席のゆきを窺う。

案の定、ゆきは口を開きかけ、すぐに苦笑いでぼやかし、視線を外へと移した。

「天気、いいね」

「夜から雨らしいけどな」

「そうなんだ」

後方に流れ去る景色を見つめたまま、ゆきは質問の答えとは違う眩きを洩らす。

ゆきは何を考えて、その言葉を発しているのか、貴久には判断がつかかねた。一緒にいる時間はそれなりに長いはずなのに、いつまで経ってもゆきは掴みどころがない。

「貴久さん」

「何だ？」

「海、行きたい」

「海？」

「ほら、もうすぐ夏だし」

そう、ふわりと微笑むゆきに、貴久の胸の奥がずきりと痛む。

ゆきの、この笑い方。

哀しそうな、切ないような、ここではないどこかを見るような瞳。初めて逢ったときから、ゆきはこんな風な笑顔を時々見せた。

そして、その諦めに囚われたような瞳に、『ゆき』みたいだと思っただ。

約一年半前。

派手な水音が耳に届いた瞬間、やってしまったと貴久は思った。店までの道の途中、アスファルトの舗装が悪く、雨が降ればいつも大きな水たまりを作る場所がある。歩道も狭く、気をつけて通らないと、歩行者に盛大に泥水を被せてしまうことになるのだ。

それを重々承知はしていたのだが、その時は少し油断をしていた。こんな時間には滅多に人通りがないからと。

更に言うと、突然かかってきた仕事の電話に気を取られていたことも大きい。

「悪い！ また後でかけ直す！」

早口で電話の相手に告げ、携帯を放り出す。すぐさまハザードを出して、車を道路脇へと寄せた。

「ごめん、大丈夫!？」

慌てて車を降り、被害者の元に駆け寄る。

二十代前半だろうと思われる、小柄な女の子だった。突然車から現れて声をかけた貴久に、その少女は何故かひどく驚いたような顔をしていた。

「うわ……、これはヒドいな」

それ以外の言葉が出てこないくらい、無残な状況になっていた。

少女の着ていた真っ白なはずのコートは、泥と排気ガスの色に染まっている。運の悪いことに、どこかの車が漏らしたオイルまでついていた。クリーニングに出しても、綺麗に落ちるかどうが怪しいところだ。

「大丈夫、です」

予想外にも、少女は穏やかに微笑んだ。少し小首を傾げ、ふわりと。

その表情に、貴久の鼓動が大きく跳ねる。

今にも儚く消えてしまいそうな笑みに、心の中がざわめき立つのがわかった。

「い、いや、大丈夫じゃないと思うよ」

何とか気を取り直し、貴久は続ける。

暗くてわかりにくいのが、少女の服は汚れている以上に激しく濡れていた。

冷え込みはこれから余計に厳しくなる時間なのに、濡れた服のままで歩いていては、風邪をひいてしまうことは間違いないだろう。

それに、こんな夜中に女の子を一人歩きさせるといっただけでも十分に危険な気がした。

「乗って。君の家まで送っていくから」

「え、でも……」

「大丈夫、変なことしようとか考えてないから。これでも一応新婚ほやほやだし」

少女を安心させようと、左手をひらひらと振って見せる。その薬指には、まだ真新しい光を放っているシンプルなデザインのプラチナリング。

それを確認して信用してくれたのか、少女はこくりと小さく頷いた。

貴久は安心して一息つくくと、後部座席のドアを開け、置いてあった紙袋からタオルを一枚取り出した。これから自分の店に持っているつもりだったものだ。

「とりあえず、これ使って。洗ってあるから綺麗だし」

「ありがとうございます」

タオルを差し出すと、少女はか細い声で礼を述べ、それを受け取る。

貴久は助手席のドアを開けて、少女を促しながら、問い掛けた。

「家、どの辺？ あ、それと名前……」

「ユキ」

「え？」

ぼつりと呟いた少女の声に、またも心臓が大きく脈打った。
少女はそのまま視線を頼りなく彷徨わせ、暗い夜空を見上げてい
る。その視線の先を追って辿り着いたのは、舞い始めたばかりの白
い花。

それに貴久は、少女が名を名乗ったのではなく、降り出した雪の
ことを言ったのだと思った。

「ああ、やっぱり降ってきたか。ますます早く送っていかないとな
ほら、乗って乗って、えーっと……」

「ゆき」

もう一度、今度は貴久に向かってそう告げる少女に、貴久は考え
を改めた。

「あ、ああ、ごめん。『ゆき』って名前のことだったんだ」

なんとという偶然なんだ、と胸中で思うが、貴久はそれを表情には
出さずに謝罪する。

苦笑混じりの貴久に、ゆきは少しだけ目を細めた。

それがまた儂くて、名前の通り『ゆき』のようだと思えた。

寒い寒い二月の、深い夜の出逢いだった。

#3 Coral Dream

リツとユキの関係について、ヨシノはつくづく不思議な二人だと思っていた。

二人は幼なじみなのだと言っている。保育園の年少組から中学一年生まで、ずっと同じクラスだったそう。

もっとも、リツたちの地元はかなり田舎で、小学校には各学年一クラスしかなかったそうだから、そんなにすごいことでもないらしい。他にも同じような友人は何人かいるとのことだった。

高校では同じ学校に通ってはいたのだが、クラスは離れ、疎遠になっただけらしい。

だからあの日、偶然再会するまでは連絡も全く取っていなかった。それどころか、同じ土地の大学に通っていたことすら知らなかったそうなのだが。

「ものすっごい、ナチュラルなんですけど……」

スタジオで、パイプ椅子に後ろ向きに跨って、誰に言うでもなくヨシノは呟いた。

視線の先には、新しい曲について話し合うリツとユキの姿。二人はヨシノの呟きにも気づかず、熱心に話を続けている。

「ここ、少し歌いにくいんだけど、キー変えていい？」

「え？ 変えるの？ リツなら歌えると思ってそうなのに」

「あのねえ、ワタクシの楽器はナマモノよ？ ユキのギターと一緒にしないでくれる？」

「あれ？ そうだったっけ？ てっきり、この辺にゼンマイが付いてるか……」

「付いてるかいつ！ って、もし付いてたら、オルゴールみたいに音外すことなく便利かも」

「オルゴールってキャラじゃないでしょ」

「うるせえっ！」

どう見ても夫婦漫才だな、などと思いつつ、ヨシノは二人のやりとりを黙って見守った。

そう。長い間離れていたわりに、再会した直後からこの二人はこんな風だったのだ。

再会した瞬間には、ほんの少し張り詰めたような空気を漂わせていたのに、二人きりで何か話して戻ってきた時にはこうだった。

まるで、離れていた間の時なんてなかったかのように。

(さて、いつものパターンなら、そろそろ漫才終了なんだよね) 毎度見慣れた光景は、いつも決まって同じような展開で幕を閉じる。

今日もその予想に違わぬ結末へと、確実に向かっているようだった。

「音階なぞる、綺麗なだけの歌なんかいらないよ。それじゃリツに歌ってもらってる意味がないでしょ？」

ふわりと、ユキがリツに向かって極上の笑みを浮かべる。

リツはそれに照れたように頬を掻いて、けれど嬉しそうに微笑う。

「ユツキーって、もっとクールビューティーだと思ってたのに、実は天然タラシだなー」

「あれは、アイツにだけだろ」

いつの間に戻ってきたのか、シュウがヨシノの隣で呟いた。持っていた袋の中からコーヒーを一本取り出し、ヨシノに差し出す。

今日はシュウがジャンケンに負けたので、コンビニまで使い走りにされていたのだ。

「さんきゅ。そだねえ、リツちゃんにはベタ甘だもんねえ。でも、付き合っていないんだよ、あの二人」

「らしいな」

ヨシノの言葉をあっさりと肯定するシュウに、思わずその長身を振り仰いだ。シュウもその事実を知っているとは思わなかったのだ。

「ユツキーに訊いたの？」

「いや、リツオ。たまたま二人で話してたときにな。ヨシノはアイ

ツにストリートに訊いたんだって？」

「だって、付き合ってるようにしか見えなかったんだもん。だから、『いつから付き合ってたんの？』って……」

ヨシノの問いに、リツは付き合ってたなんかないと苦笑したのを思えている。そして、その後には付け加えた。

「今は歌うことが一番好きだから」と。

その答えに、ヨシノは啞然とさせられた。

間違はなく、リツはユキを好きはずだ。それは誰の目からも明らかほど。

けれど、それよりも歌うことの方が大切だと言い切ったのだ。

「ユキも似たようなことを言ってたよ。似た者同士なんだよな、あの二人」

「そっか。だったら、ほっといてもそのうちくつつくか」

「違うない。さて、おーい、律野夫妻ー！」

シュウがからかうように笑って、話を終えたらしい二人に呼び掛けた。

「誰が夫妻だ、誰が！」

怒ったように見せて、実は照れているだけのリツがひどく可愛らしい。

そう思ったのはヨシノだけでなく、シュウも、そしてもちろんユキも、優しい眼差しで見つめていた。

「怒るなって。ほら、ミルクティー」

「あ、シュウ、ありがとなー」

缶ジュース一つで簡単に懐柔されているリツに、シュウは単純だなと苦笑しつつ、ユキにも残りの一つを差し出した。

「どういたしまして。ユキはブラックで良かったよな？」

「サンキュー。ちょっと休んだら、さっきの続きしようか」

「リツちゃんもユッキーもそんなに休んでないじゃん。あと十分は休憩しようね」

ユキもリツも妥協できない性格だから、練習が始まると根を詰め

過ぎる傾向がある。こうやって、時々ブレーキをかけてやる自分の役目だと、ヨシノは密かに思っていた。

リツがヨシノに微笑みだけで返す。ユキも、自分たちへの気遣いに気づき、苦笑混じりにOKと呟く。

ヨシノの想いは、確実に二人に届いて、返ってくる。

リツとユキの笑顔に、ヨシノはしみじみと喜びを噛み締めた。

それは、このバンドが今のメンバーになってから、何度目かわからないくらいに感じる想い。

リツもユキもシュウも、ずっと一緒にやっていきたいと、心の底から思える仲間だった。

特にリツは。

リツには、本当に救われている。

自分自身がもっとも苦しんで、何もかも捨て去ろうとしたとき、それをとどめてくれたのがリツだった。

リツがいなければ、今の自分はいなかったのだ。

ヨシノはそっと、左手のブレスレットに右手を添える。

リツが誕生日にくれた、レザーとシルバーで出来たそれに、感謝の想いと、これからの未来への願いを込めて。

#4 Irritative Smile

金曜の夜は、客が多い。

アルコールを扱う多くの店では共通した事柄だろう。

この日の『Anastasia』も、例外ではなかった。

「トエ、これ5番さん」

「了解」

カウンターに置いた料理を、慣れた手つきで運んで行く後ろ姿。

小柄で華奢な体つきの割に、よく動き、よく働く彼女の顔には、いつも穏やかな笑みが浮かべられている。

榎野はそんな彼女 戸枝ゆきを見て、疑問に思うことが多々あった。

「トエちゃんは今日も頑張ってるね」

カウンター席を陣取る常連の早川が、同じようにゆきの働く姿を眺めながら、感心したように呟く。それに榎野は溜め息で応えた。

「働くのが好きとか言うてましたけどね。ホンマ物好きやわ」

「おまえももつと見習えよ。トエちゃん、どんだけ疲れててもあの笑顔だぞ？」

早川の指摘する通り、榎野はゆきの笑顔以外の表情をほとんど見たことがない。

それは接客業に携わる者としては確かに見習うべきものではある。しかし、榎野はそんなゆきの笑顔を見ていると、苛々することしきりだったのだ。

「榎野ももう少し笑顔ってもんを身につけたらどうだ」

「可愛いお姉さんにやったら喜んで」

「客を選ぶなよ」

呆れる早川に、榎野はニツと口の端だけで笑ってみせた。

それを目にした早川は、少しばかり顔を顰める。

榎野の笑顔は、ゆきのようにほっと心を和ませるものではなく、

どこか不適で不遜に見えたからだ。

「前言撤回。客減るからやめとけ」

「ハヤさんが笑え言うたくせに」

ひどい言われ様だと抗議する榎野に呆れたような苦笑を零し、早川はカウンター奥のバックルームを覗きこむように窺う。

その表情から、早川が誰を気にしているのかはすぐに察することができた。

「店長なら、今日は休みやで。締めは俺がやるように言われとるし」「あ、そうなのか」

榎野の先回りした答えに、早川はひどく落ち着かないような、居心地の悪そうな、そんな態度だった。

その原因に心当たりはあったのだが、あえて気付かぬふりで榎野は話を続けた。

「ハヤさん、店長に何か話あったん？」

「ん……、話っていうか、まあ、何だ……」

歯切れの悪い早川の視線が、ほんの一瞬ホールを歩いているゆきに向けられた。

それに、やはりと思いながら、声のトーンを少し落とす。

「トエとのこと？」

「榎野、おまえ……」

「知つとるよ、あの二人のことは。トエも俺が知つとるってわかっとる。ハヤさん、どっかで一緒のとこ見たん？」

早川は軽く頭を抱え、自らを落ち着かせるようと、クールマイルドを取り出した。銜えたそれに火をつけると、溜め息と同時に紫煙を吐き出す。

「仕事の出先だ。だから理恵子さんに見られるようなことはないだろうけど」

「なら、ええやん」

「ええやんって、おまえな」

「まあ、とにかくちょっと、ほっとたつて。俺も何とかせなアカ

んとは思つとるから」

有無を言わせぬ口調で、その話を終わらせる。早川はなおも何か言いたげだったが、客からの注文を受け取ったゆきが戻ってきたため、断念せざるをえなかった。

（悪いなあ、ハヤさん）

ゆきが伝えに来た注文を受け、厨房で材料を軽やかに刻みながら、心の中で謝罪をする。

できれば、理恵子以上に早川には知られたくないと榎野は思っていたのだ。

それは、早川のゆきを見る視線の所為だった。

早川はゆきに好意を抱いている。さすがに目の前で口説こうなどとはしないが、来店する度にゆきを気にかけているのは明らかだった。

だからこそ、ゆきと貴久の関係は知られたくはなかったのに。

こつそりと小さな嘆息を洩らし、手早く作り上げた料理をカウンターへと持っていく。

「は、7番さんのサラダ」

「了解」

変わらぬ笑顔で受け答えするゆきの背中を見つめながら、閉店後を思つて少しばかり気が重くなる榎野だった。

最後の客を見送り、表の看板を照らすライトを落として、ゆきがカウンター前まで戻ってくる。その目の前に、榎野はコーヒーカープを差し出した。

「ブラックでよかったやろ？」

「気が利くね、まつきー」

「ええ男やる？」

「自分で言わなきゃね」

榎野の本気と冗談半分半分の言葉に、ゆきは楽しげな笑いを零し、

カウンターチェアに腰掛ける。工作中よりいくぶん素に近いけれど、それでもどこか感情が伴っていないように感じる笑みだった。

その笑顔を見つめながら、榎野はいつもと変わらぬ調子で話を切り出した。

「ハヤさんが、ト工見たって」

「へえ。どこで？ 声かけてくれればいいのに」

「そら無理やろ。店長と一緒にいるんやから」

ピタリと、コーヒーを口元に運ぶ手が止まる。が、すぐに思い直したように、そのままカップに口をつけた。少しだけ苦そうな表情は、コーヒーの所為だけではないだろう。

「そつか。早川さんに知られちゃったか」

ぼつりと呟く声に滲む色で、ゆき自身も早川には知られたくないと思っていたことが窺える。

「おまえさ、そろそろやめた方がええんとちゃうんか？ 店長と付き合っとなかて、何もええことあらへんやろ」

ゆきがこの店の店長である貴久と付き合っていると知ったのは、三か月ほど前。

たまたま店が休みだったその日に、貴久とゆきが二人でいる姿を遠出した先で見つけた。

人目を気にするように地元から離れた場所で会っている二人に、当然疑問を覚えた。それと同時に怒りに似た感情も。

貴久は既婚者だ。そして、その妻である理恵子は榎野の従姉にあたる。

世間的に見たらどうしても不倫にしか見えない二人の関係は、榎野を不愉快にさせるに充分だった。

ただ、一つだけ腑に落ちなかった。

貴久は傍から見てもわかり過ぎるほどに理恵子を大切にしているし、不倫できるような性格でもない。

ゆきにしても、掴みどころはないのだが、火遊びするようなタイプでもなく、スリルを求めるような性格でもない。

何より、二人の間には男女間の恋愛感情だとか、ましてや身体だけの関係だとか、そういうった雰囲気は一切ないのだ。不倫という言葉がどこまでも不似合いなほどに。

後日、榎野は貴久でなくゆきに確認した。

するとゆきは、あっさり二人で何度も会っていることを認め、けれど不純な関係ではないと言い切ったのだ。

それを聞いて、ますますどうしようもないような気分させられた。

けっして不倫関係ではないといわれても、周りはそう見ない。バシたら最終的に傷つくのは、ゆきの方だろう。

そう思ったからこそ、何とかしてやりたいと思った。

「いいこと、ね」

ゆきが指先でコーヒークップを遊びながら、榎野の言葉をくり返す。

「せや。既婚者やし、金持ちでもないし、マンション買ってくれるわけでもないやろ？ まあ、優しいんは認めたるけど」

「……『ゆき』って」

「え？」

「貴久さん、『ゆき』って呼んでくれるから」

ゆきは、そう微笑んだ。

それまで作っていたものとは違う、感情の籠もった微笑。

今にも泣き出しそうな、切なそうな、儂い笑み。

「それだけだけど、私にとって、『いいこと』なんだよ？」

時折見せるゆきの笑顔は、いつも痛くて、見ていて癪に障る。

榎野は言いたいことははっきり言うのがポリシーだから、以前に直接そう言ったこともあった。

するとゆきは、また困ったような苦笑を浮かべ、「ごめんね」と一言だけ零したのだった。

「名前で呼んで欲しいなら、俺かて呼んだるがな」

「まっさーじゃ駄目だなあ。『声』が違うし」

「ゼイタクモンが。こんなセクシーヴォイスの槇野様を捕まえておいて」

槇野の台詞に、ゆきはくすくすと微笑った。けれど、どこか虚ろで、目線もあらぬ方向。

誰もいないはずのその方向に、誰かがいるかのように。

「なあ、トエ。おまえ、いつつも何処見てんのや?」

「何処つて?」

「店長といてても、店長を見てるわけちゃうやろ?」

「貴久さんも、私を見てるわけじゃないよ」

淡く笑みを浮かべて、ゆきはまた甘くないコーヒーを一口飲む。

槇野はただ、溜め息を零すばかりだ。

「まっきー」

「何や?」

「アリガト」

「何の礼やねん、それは」

「ん? いろいろ」

そう誤魔化すように、ゆきはまた、いつものあの遠くを見るような目で笑った。

遠くの誰かを見るように。

穏やかに、切なげに 嗤った。

5 Vivid Desire

その名を呼ぶだけで、温かな気持ちに包み込まれる。

ユキはそんな相手なのだ、リツは心の奥底で思っていた。

線が細く頼りなげに見えて、実際はしっかり者で頼りになるのがユキ。

三人兄弟の一番上だからだろうか。同じく三人兄弟でも、末っ子のリツは年下のように扱われてしまうことがよくあった。

だから、余計に……。

「『好き』だとか、今更言えないっつーの」

一人戻ったマンションで、ここにはいない友人に対してのぼやきを、リツは苦笑いとともに零した。

自分の想いなど告げられない。

だからこそ、リツは詞を書くのだ。

歌にしていまえば、吐き出せない想いを口にしても許されるから。

「ったく、ヨシノはヒトの気も知らないで」

更に愚痴紛いの言葉が口について出るが、ヨシノ自身に悪意があつての発言ではないこともわかつていた。

それは、数日前のライブの打ち上げの時のこと。

ユキとシュウが同時に席を立った瞬間、狙っていたかのように

というよりも狙い澄まして、ヨシノが訊いてきた。「いつから付

き合ってたんの？」と。

あまりにもストレート過ぎる問いに、リツは驚くを通り越して笑ってしまった。

「付き合ってたなんかねえよ」

「ごく簡潔に答えると、ヨシノは心底驚いた様子で「うそ！」と「マジで？」を何度も繰り返した。

本当だと言ってもなかなか信じてもらえず、二人が戻ってくるま

ですつこく同じ質問を確認し続けたのだった。

ユキは、昔から傍にいた。

お互いに同級生たちとは誰とでも仲良くできる性格であったが、ユキは他の誰よりも気が合ったし、一緒にいて自然体でいられた。

だから、ユキと一緒にバンドをしないかと誘われた時も、ごく当たり前のよう受け入れていた。

自分の友達が、ハルが、ユキを好きだと知るまでは。

ハルからユキへの想いを打ち明けられた時、リツはひどく戸惑ったことを覚えている。

ハルは、リツもユキを好きなことを知っていたからだ。知っていたからこそ黙っていたらなかったのだと、ハルは申し訳なさに、けれど潔く言い切った。

リツにとつてのハルは当時同性で一番仲が良く、ユキといえる以外はハルと行動することがほとんどだった。親友だと思えるほど信頼していたし、失いたくはなかった。

だから、気持ちを偽った。「今更、どうこうしようなんて思っていない」と。

恋より友情をとった。そう言ってしまうえば聞こえはいいかもしれない。

けれど、実際はそうではなかった。

リツはユキに想いを告げる勇気が持たず、ただ逃げただけだった。フラれてしまえば、もう隣に立って歌うことすらできなくなってしまうから。

そうなるくらいなら、親友と好きな人との恋路を応援する方が幾らかマシに思えたのだ。

けれど、今になって思えば、それは大きな間違いだったのだと気付いた。

ユキは、ハルの告白を断った。

どんな言葉で断つたのかは知らないが、その日を境にハルのリツに対する態度が変わった。それとなくリツを避けるようになったのだ。

また、ハルとの仲を取り持とうとしたことは、ユキとの関係をぎくしゃくとした居心地の悪いものにさせた。

三人の間に走ったほんの小さな亀裂は、時間の経過とともに埋めがたい大きな溝になっていった。

いつしかバンドは解体し、リツは二人ともと疎遠になったまま卒業を迎えた。

最善だと思つた選択は、リツに何も残してはくれなかった。

ユキのバンドを辞めると同時に、リツは歌うことも辞めた。

もちろん、友人たちとの付き合いでカラオケに誘われることもあったが、何かと理由をつけては断り、やむを得ない場合で参加させられても、極力歌わないようにしていた。

否、歌わないのではなく、『歌えなかった』。

マイクを握れば、ユキの優しいギターの旋律が耳に甦る。

歌うことを意識する度に、嫌でもユキと一緒に音を作っていたことを思い出す。

それは当時のリツにとっては苦痛でしかなく、歌から遠ざかるしか逃れる術がなかったのだ。

そんなリツが、ユキと再会したのはいくつもの偶然が重なって生まれたことだった。

バンドなどに縁も興味もないと思っていたゼミの友人　ヨシノが、実は昔から音楽活動を活発に行っていたこと。

そして、ヨシノと一緒にバンド活動をしているのが、ユキと同じ大学に通っているシュウだったこと。

更に、シュウの所属する軽音部にユキが入部し、シュウと意気投

合してしまったこと。

けれど、それだけならば、多分、再会は果たされなかつただろう。三つの偶然が上手く噛み合う為の、大きなきっかけが必要だった。そのきっかけが、リツとヨシノの所属するゼミのコンパの二次会だった。

二次会がカラオケと聞かされて、リツは毎度の如く辞退しようと思っていた。しかし、入学当初からゼミでの世話焼き役になっていたヨシノに強引に却下されてしまったのだ。

リツがあまり積極的に交流しようとしていないのを良しとしなかつたのだろう。

強引なヨシノに引きずられるように連れて行かれ、ほぼ無理やり歌わされたのだった。

そんな強制カラオケの途中、さすがに堪え切れなくなったリツは、「明日朝早いから」と嘘をついて逃げ出した。

店を出て、酔っぱらった中年サラリーマンや、大学生同士らしき仲睦まじいカップルとすれ違いながら駅に向かう。

「リツちゃん！」

背後から追いかけてくる声に、リツは反射的に振り返った。ヨシノだ。

連れ戻されるのかと思つたけれど、だからと言って逃げ出すわけにもいかない。

仕方なくその場に立ち止まり、ヨシノが近くに来るまで待つしかなかった。

「あのさ、リツちゃん、明日の夕方暇？」

「え？」

予想していた言葉とは全く違った為、間の抜けた声を洩らしてしまふ。

けれど、ヨシノは妙に力の籠った目でリツを見つめ、表情も真剣そのものだった。

「何か用事あるの？」

「あ、いや、ないけど」

「じゃあ、付き合ってた！ 四講目終わったら、西門前ね！」

「え？ あ、はい」

理由も目的も全く告げられなかったのだが、ヨシノの気迫に圧されて気付けば承諾の返事をしていた。

それを確認すると、ヨシノは満面の笑みを浮かべ、「じゃあ、また明日」と踵を返し、元気よくも来た道を走り去っていったのだ。つた。

翌日、待ち合わせ通りの時間に西門へと向かうと、ヨシノは既に待ち構えていた。

そのままどこへ行くとも告げられず、辿り着いた先は他大学のキャンパス。

そう、ユキとシユウの通う大学だった。しかし、当時のリツはユキの進学先など知らない為に、再会の可能性など微塵も考えていなかった。

慣れた足取りでヨシノはキャンパス内を横切り、ユキたち軽音部が使用している練習用のスタジオまでリツを連行した。

「ユツキー！ 最高のヴォーカル連れてきたよー！」

スタジオの重い扉も蹴飛ばさんばかりの勢いで、ヨシノは中に入っていく、リツはそんなヨシノに引張られて転びそうになりながら、中にいた二人と対面した。

「……リツ？」

「ユ、キ……」

互いに、どうしてここにいるのかと、呆然とするしかなかった。

顔を見るのは卒業式以来。言葉を交わすのは、それよりさらに前のバンド解散以来だった。

「え？ ユツキーとリツちゃん、知り合いなの？」

「うん、まあ」

驚き混じりのヨシノの問いに、ユキは歯切れの悪い返答をした。気まずさを誤魔化すような作り笑顔に、リツは気付かぬうちに詰めていた息を大きく吐き出す。

「幼なじみだよ」

戸惑いを隠せない様子のユキに、リツはできる限りの笑顔を向けた。

けれど、二人の間に流れる空気は、どこか重い。

リツを連れてきた張本人であるヨシノも、ユキと一緒に練習をしていたシユウも、その雰囲気口を挟むことも出来ず、ただ見守るだけだった。

「久しぶり」

「うん。……まだ、歌ってたんだ？」

「もう歌ってないよ。ヨシノ、ちょっとユキ借りていい？」

「あ、うん、どうぞ」

「サンキュ」

ヨシノに短く礼を告げると、リツは躊躇いがちなユキの手を、少し強引に引いて外に出た。たまたま目にとまった、雨風に晒されて色褪せたベンチに腰掛ける。

ユキは、リツの前に立ち尽くしていた。

思ってもみなかった再会はお互い様だというのに、心底困り果てた顔で、ただ立ち尽くす。

「ユキも座れば？」

何とか話の糸口を掴もうと、またも無理やり浮かべた笑顔をユキに向ける。けれど、ユキの表情は冴えないままだった。

「リツ」

「何て顔してんの。何か周りから見たら、ユキを苛めてるように見えるじゃん」

「ごめん」

「いや、謝らなくていいからさ」

「ごめんっ!」

勢いよくユキが頭を下げた。真剣に、心から許しを請うように。何一つ誤魔化さずに。

その謝罪の向けられる先に気づき、リツはようやく笑顔を作るのを辞めた。

何も偽らないユキに、作った笑顔では駄目なのだ。

「ユキ」

「あの時のこと」

「ユキ、もういいから」

リツは立ち上がり、ユキの柔らかな髪にくしゃと指を絡めた。そのまま少しばかり強引に顔を上げさせる。

あまりにも悲壮な表情をしているユキに、ぷっと小さく吹き出した。

「ヒドイ顔」

「リツ」

「……こつちこそごめん。ユキは何も悪くなかったのに」

「悪くないと言い切れないでしょ。それこそリツは何も悪くないし」

「んじゃ、喧嘩両成敗で謝りっこなし。それでいい？」

リツ自身も強引な決着の付け方だと思った。けれど、そうでもないユキはきつと謝り続けるだろう。

謝罪は、もう要らない。

リツが欲しいものは、そんなものではなかった。

「相変わらず、乱暴なまとめ方するなあ」

くしゃりと、ユキが呆れを含んだ笑顔になった。懐かしい、笑い方。

求めていたものが得られて、リツも自然と破顔する。

「ユキこそ、相変わらず辛気臭く考え過ぎ。そんなんじゃ若いうちにハゲるよ？」

「ハゲません。まったく、リツはいつも適當すぎなんだから……」

そう言いながら、ユキはリツの隣に腰を下ろした。

その距離は、あの頃と変わらない、触れそうで触れない微妙なもの。けれど、それは二人にとっては最も居心地の良い間合いだった。離れていた時間は長かったはずなのに、隣に並ぶとそんな時間などなかったかのように自然で、当たり前で、

欠けていたパズルのピースが、上手くはまったような、そんな感覚。

それでも、まだどこか不完全な気がして仕方がなかった。あと一つ、どうしても足りない、埋まらない部分がある。

その最後のピースは、すぐに見つかった。

空白の時間を埋めるように、それぞれの近況などを話して十数分が過ぎた頃、二人は揃ってスタジオへと戻った。

スタジオの重い鉄のドアを開けると同時に、音が流れ出してくる。ヨシノとシュウ、そしてリツの知らない女性が、ギター片手に歌っていた。

リツの、よく知る歌を。

(ユキの、歌だ)

かつて、ユキのギターでリツ自身が歌った曲を聴いて、眉間に皺が刻まれる。

ユキの作った曲を、見知らぬ人間が歌う不思議さと、不愉快さ。

「違うよ、それ」

気付かぬうちに、リツは口に出していた。言わずには、いられなかった。

驚いたヨシノとシュウの手が、女性の歌が、止まる。

「リツ」

「違うだろ、ユキ。その歌は、そんな風に歌う歌じゃない」

言いながら、まっすぐに女性に向かっていく。彼女はリツの持つ秀囲気に気圧されたように、マイクスタンドの前から退いた。

もう何年も遠ざかっていたマイクの前に、リツは自らの意思で再び立つ。

そして、ユキに向けて、一言だけ放った。

「弾いて」

それだけで、充分だった。

ユキは黙ってギターを抱え、いつものポジションに向かう。シューに向かって片手で合図を送ると、カウントが始まった。

耳に馴染んだ優しい旋律に、リツは瞳を閉じ、身を委ねる。

重なる音と音、声と声。

ぴたりと、ピースがはまった。

ようやく、リツは気付いた。

ずっと歌いたかった自分に。

ユキのギターで、ユキの曲を歌いたかった自分に。

すべてのピースが揃ったパズルには、二人並び立って音を作る姿が描かれていたのだった。

そしてリツはこの日、『Weier Schnee』の正式なヴォーカリストに任命された。

再会を思い返しながら、リツは自室のベッドに身を投げた。

「今更、変えられっかよ」

乱暴に、苦い言葉を吐き捨てる。

ユキへの想いは、今も変わっていない。それどころか、かつてよりももっとずっと、強いだろう。

けれどリツは、その想いを封印するにしたのだ。

あの再会の日に、自ら誓いを立てた。

恋愛感情などがあるから、つまらないイザコザが起きるのだと、そう思えたから。

そんなことで、ユキとまた離れてしまいたくなくなかった。

だからただ、ユキの作った歌を、ユキのギターに合わせて歌えれ

ばい。

それが、リツの一番の望みだった。
何よりも強い、望みだった。

#6 Sterile Relation

早川が槇野にゆきと貴久の關係に気付いたことを告げてから、数日後。

ほんの少し前まで、店内には大学生らしき女の子の三人組と、互いにスーツ姿のカップルの姿があったが、平日ということもあり早々に店を後にしていた。

今、店内にはゆきと早川の二人きり。槇野は休みで、貴久も一時間ほど前から所用で外に出ていた。

閉店時間までもういくらも時間がないということで、ゆきが表の看板の明かりを落として戻ってくると、早川は思いきって口を開いた。

それは、槇野に口止めをされていたものの、ずっと心に引つ掛かっていたことだ。

「トエちゃん」

「店長とのこと、訊きたいんですか？」

本題を切り出す前にゆきに先回りされてしまい、早川は二の句を告げられなくなってしまった。

そんな早川を見て、ゆきはくすくすと笑いながら、目の前に新しくバーボンのグラスを差し出す。どうやら、ゆきの奢りということらしい。

「早川さん、わかりやす過ぎ」

年下の女の子にそう笑われて、早川は気恥ずかしさを誤魔化すように煙草をくわえた。形勢を立て直す為に、ゆっくりと肺を紫煙で満たしていく。そして溜め息にも思えるような深い息とともにそれを吐き出した。

「いつから？」

簡潔な質問は、それでも意図を過たずゆきに届いた。

ゆきは自分用にアイステイーを作り始めながら答える。

「二人で会うようになったのは、ここで働くよりも前」

「え？ じゃあ」

「違いますよ。ここが貴久さんのお店だと知ったのは、面接に来た時が初めてです」

「すごい偶然でしょ、とゆきは苦笑混じりに続けた。

いつもは『店長』と呼ぶゆきが、貴久の名前を当たり前のように口にする姿に、胸の奥がキリと痛んだ。

そして、その面接の時にどんなやりとりがあったのかはわからないが、ごく普通の面接の会話でなかったのは確かだろうと早川は想像する。

それがまた、新たな痛みを生んだ。

「出逢ったのは、冬でした」

少しの沈黙の後、ゆきがおもむろに語り始めた。早川はただ黙ってその続きを待つ。

一口、出来あがったばかりのアイスティーで喉を潤すと、ゆきは懐かしむような表情で続けた。

「私が夜道を歩いている時に、貴久さんの車に思いっきり泥水をひっかけられたんです。貴久さん、かなり慌てて、お店に持ってくるつもりだったタオル貸してくれたり、家まで送るって言ってくれたり。後から聞いたら、お店に急いでるところだったらしいです」

薄い笑みとともに淡々と話しながら、ゆきはマドラーで意味もなくアイスティーをかき混ぜる。カラカラと、場に似合わないほど涼やかなで軽やかな音が響いた。

「『また会えるかな？』って貴久さんから言われました。でもね、早川さん。それは早川さんが思ってるような意味じゃないんですよ」「俺がアイツの親友だからって気を遣わなくてもいいよ」

「そんなんじゃないです。本当にそうなんです。だって貴久さん、私に指一本触れないんですよ？」

ゆきの告白に、早川は正直驚いた。

それなりの歳の男女が、二人きりで隠れて会っている。しかも、

一般的には「不倫」と呼ばれてしまう関係だ。当然、それなりの行為も発生しているだろうと早川が思ってしまうのも無理もない話だろう。

しかし、ゆきはそれをきっぱりと否定したのだ。

「傍から見れば『不倫』だって言われるのはわかっています。でも、私と貴久さんの関係はそんなんじゃないんです。お互い、『男』と『女』って見方じゃないんです」

ゆきの説明を聞いて、早川の中に言い知れぬ感情が湧き上がる。彼女の言う通りならば、不道德な関係ではないのだろう。

しかし、恋愛感情でもなく、ましてや身体だけの関係でもないとするのならば、この二人は何を求めて一緒にいるのだろうか。

そこには、目に見えない不思議な絆のようなものがあるように感じ、胸中にじわりと嫉妬が滲むのを感じた。

「貴久さん、私のことを『ゆき』って呼ぶでしょう。今の私には、それが大切なことだったりするんですよ」

「『ゆき』って呼んで欲しいなら、俺だって呼ぶよ」
切実な想いでそう伝える。

何も既婚の三十路男でなくてもいいだろうと。

よりによつて、自分の親友でなくてもいいだろうと、本当に心からそう思った。

「まつきーにも同じこと言われました」

「俺は槇野と同レベルか」

ゆきが苦笑に乗せて返した言葉に、早川はますます情けない気分になされた。

早川の落ち込んだ様子に、ゆきは申し訳なさそうに微笑むと、「ごめんなさい」と小さく呟く。

「早川さんが私や貴久さんのことを心配してくれていることはよくわかります。でも、ごめんなさい」

「トエちゃん、俺は」

「言わないで下さいね」

勢いで気持ち吐き出そうとした瞬間、静かな、けれど強い響きを持った声に遮られた。

ゆきは作り物めいた笑顔で、早川を見つめていた。

「それ以上は言わないで下さい」

その瞬間、早川はゆきが自分の想いに気付いていることを悟った。それと同時に、早川の想いをゆきが受け入れはしないだろうことも、それくらい完璧に、ゆきは早川との間に線を引いていた。ゆきの笑顔が、ラインを踏み越えることを許さなかった。

「そろそろ店長が戻ってくる頃ですね」

この話はここで終わりだと言わんばかりに、ゆきは話を切り替える。

時計を確認すると、閉店時間はとうに過ぎ、貴久がいつ帰ってきてもおかしくはなかった。

こんな話をした後では貴久と顔を合わせにくいと思い、早川は席を立つ。

じゃあと短い言葉で精算を頼むと、いたたまれない思いを引きずったまま店を出た。ゆきも早川を引き留めようとはしなかった。

通り慣れた道をとぼとぼと歩き出す。十メートルほど離れた頃、後方にある店の駐車場に車が入っていくのに気付いた。上手いタイミングで貴久とすれ違うことができたようで安堵する。

しかし、この後貴久が店に戻り、ゆきと二人きりになるという事実、再び苦い思いを噛み締めた。

恋でもなく、欲求だけでもない関係。

不毛としか思えないのにそう言い切れないのは、ゆきの言葉から二人だけにしか通じないと思えるような何かを感じたからだろう。

もう一度だけ、早川は店の方角を振り返る。

大きな溜め息が一つ零れた。

やがて、すべてを振り切るように身を翻すと、ゆっくりと歩き出す。

振り返らず、まっすぐに。

#7 Supreme Love

「おまえらさ、一体いつになったら付き合うの？」

まだ練習を終えて間もない、いつものスタジオ。

いつもならば四人仲良く揃って練習場を後にするのだが、この日はリツとヨシノが私用で先に帰っていた。二人が共通で好きなバンドのライブがあるからだ。

申し訳なさそうに、けれどウキウキとした足取りでスタジオを出ていった二人を笑顔で送り出した後、ユキとシュウは後片付けをしていた。

それがひと段落ついた頃、シュウがポケットから取り出した煙草をくわえながら、突然そんな不躰な質問をぶつけてきたのだ。

ユキは思わず口元に運びかけた缶コーヒーを持つ手を止める。

「何で？」

「何でって、ほとんど付き合ってるようなモンだろ？」

紫煙とともに呆れも吐き出しながら、シュウは重ねて問う。ようやく吸える煙草の味は一際美味しく感じられた。

練習中はユキに喫煙を禁止されている。理由は『リツのノドに悪いから』。

それだけでも、ユキに世界がどれだけリツ中心に廻っているのかがよくわかる。

そして、だからこそその疑問だったのだ。

「リツとは、一生付き合わないかもね」

「は？ だっておまえ、アイツのこと好きなんだろう？」

「うん。片想い歴は長いね」

これだけ尽くしておいて、笑って済ませているユキは正直馬鹿だとシュウは思った。

ユキは、苦笑いでなく普通に笑っている。いつも通り、穏やかに。その笑顔のまま、ユキは「帰ろう」と指先だけでシュウを促した。

戸締りを確認し、狭いコンクリートの階段を上り始める。

「つーか、両想いだろつが、おまえら」

「そうだね」

予想外の返答に、シユウは階段の途中で足を止めた。

ユキの言い方は、あまりにもあっさりとし過ぎていて、まるで「今日は寒いね」「そうだね」というようなノリだったのだ。

「わかってんなら」

「いいんだよ、別に」

「何でだよ」

あまりにも余裕なユキの態度に、ついイラついてしまう。

はつきり言ってしまうえば、見ているシユウからすればもどかしくて堪らないのだ。同じようにヨシノも思っていて、彼女の場合は結構リツにせつついていいるようなので、シユウ自身は静観している風を装ってはいるのだが。

そんなシユウの気持ちを知ってか知らずか、ユキは伏し目がちに微笑んだ。

そこには自嘲と憂いが含まれている。

「リツが臆病になってるのはわかるから……」

「臆病？」

シユウが訊き返すと、困ったような、けれどどこか嬉しそうな表情を向けられる。

リツのことを想うときのユキの笑顔は、他のどんな時よりも優しく、毅然。

「歌バカだからね、アイツ」

「……歌バカはわかるが、おまえの言ってることはさっぱりわからんぞ？」

「シユウはわからなくてもいいの。リツさえわかってればそれでいい」

そう言うてにっこりと満面の笑みを浮かべるユキ。

本当に呆れるくらいリツを大切にしているユキが羨ましくもあり、

それと同時に危機感も覚える。

もし、互いの身に何かあったならば、この二人は壊れてしまうのではないかと……。

「ホントおまえ、リツ至上主義ね」

「うん。当然」

「はいはい。惚気は余所でやってくれ」

心の中に生じた危機感を微塵も出さず、シュウはわざとらしく大仰にため息をついた。

そんな心配は、してみても意味がない。そう知っているから。

「リツの為に……」

「え？」

「リツの為に曲書いて、ギター弾ければ、それだけで十分なんだよ」

「ユキ」

ああ、そうかと、シュウはそこで初めて気づいた。

ユキの書く曲は全てリツの為のもの。だからリツに再会するまでのユキは、いつも誰がどう歌っても納得のいかない表情をしていたのだ。

ユキの曲は、リツが歌わなければ意味がない。

実際、リツが歌うユキの曲は、他の誰が歌うより胸に響いた。

あの日、先輩を退けて歌い出したリツに、シュウは鳥肌が立ったのを今でも覚えている。

ユキがここまでリツを大切にするのもわかるような気がした。

「雪だ……」

外に出て第一声、ユキが小さく呟いた。

大きな牡丹雪が、ふわふわと緩やかに舞っている。

スタジオに入る前とは違い、街はうつすらと白いわたぼうしに包まれていた。それだけで、見慣れた街並みが幻想的に変化するのだから不思議だ。

「うわー、サイアク。とっとと帰ろうぜ」

「やっぱいいよなあ、雪」

「は？」

「いつぺんなつてみたいとか思ったことない？」

ユキの振り向きざまの微笑に、シュウは思い切り脱力感を覚えた。数日前に似たようなやりとりをしたことを思い出したのだ。

「やっぱり、おまえら夫婦だわ」

「何で？」

「リツオもおんなじこと言ってたよ。『雪になってみてえ』って…」

その言葉を聞いた瞬間、ユキの顔にひときわ優しい笑みが生まれる。

その笑顔はきつと、老若男女問わずに見惚れてしまいそうなほど綺麗だ。見慣れているシュウでさえも例外ではない。

そして同時にユキの、リツに対する想いの深さが嫌でもわかる。

「リツ、昔から雪が好きだからね。雪降ると仔犬みたいに駆け回ってたよ」

「仔犬……。ぷっ、アイツらしい」

「可愛いでしょ」

「だから惚気はいいって！」

早くくつつけ！ と心の中で毒づきつつ、純粹に二人の幸せを願わずにはいられない。

ユキもリツも、シュウにとっては大切な仲間だから。

「あーあ、雪になりたいなー。……。あ、そうか。雪だ」

「ああもつ、今度は何だ？ ほんつと、おまえって突拍子がないっていうか」

「今できた、新しい曲。次の曲は『雪』だよ」

シュウの愚痴まじりの言葉も全く聞こえていないのか、ユキは自信に満ちた表情で空を見上げる。

きつと、今のユキの頭の中には、リツにどんな風に歌ってもらおうかとか、リツならばどう歌ってくれるのだろうかとか、そんなことばかりで一杯なのだ。

「……作曲馬鹿」

ぼそりとシユウは呟く。心の中では「作曲」の前に「リツ専用」という言葉を付け加えて。

聞こえるかどうか微妙な大きさの声は、それでもしっかりとユキの耳に届いていたらしい。「最高の褒め言葉だね」と、屈託のない笑みとともに返った。

その笑顔は、シユウにとって忘れられないものになった。

8 Declared Permission

涼やか且つ軽やかなドアベルの音が耳をくすぐるのとほぼ同時に、印象的な、独特の雰囲気を持った声に「いらっしやませ」と迎えられた。

ハスキーなのにどこか透明感を漂わせる、硬質なのに柔らかさを内包した声。

嫌でも耳に残る声だと、理恵子は思った。

昔歌をやっていた所為か、つい特徴のある声は分析してしまう。そんな自分の習性に苦笑を洩らしながらも店内に足を進める。

「あれ？ 珍しやん。どないしたんや？」

たまたまホールに出ていた榎野には理恵子の姿が見えたらしく、入り口まで迎えに来てくれた。

確かにこの店に来るのは久しぶりだった。貴久と結婚してからは、多分、一度来たきりだったと思う。

頭一つ分以上高い位置から見下ろしている榎野の顔が、どこか興味津々な風に見えるのは自分の先入観からだろうかと思うが、すぐに考え直す。純粹に好奇心の塊なのだ、この四つ年下の従弟は。

「うるさいわね。別にアンタに逢いに来たわけじゃないわよ」

「エライ機嫌悪いなあ。ブツ細工な顔してんで、自分」

相変わらず口の減らない従弟にむっとしつつも、まともに相手をしていては時間の無駄だと割り切って反論を諦めた。

榎野の脇をズカズカと不機嫌丸出しですり抜け、カウンターへと向かう。

「……理恵子さん？」

「あらお久しぶり、脩一さん」

カウンター席には理恵子もよく知る夫の親友・早川脩一の姿があった。

その向かいには小柄な女の子がいて、二人で話していたのだろう

と理恵子は推測する。

「珍しいね。こつちに来るなんて。……あ、トエちゃん、この人」

「店長の奥さんでしょ？」

早川の言葉の途中で、その女の子が答えた。

ふわりと浮かべた笑顔が、はきはきとした口調とは対照的にどこか危うげな雰囲気を併せ持っている。

そんな彼女を見て、理恵子は心中で一人納得していた。

「あれ？ 会ったことあるの？」

「ないですよ。でも、店長からもまつきーからも聞いてますから。

名前でわかつちやいました」

「何だ、そうか。理恵子さん、彼女は戸枝ゆきちゃん。みんな『トエ』ちゃんって呼んでる」

「初めまして」

早川の紹介に、ゆきは笑顔を作り、頭を軽く下げる。その笑い方がまたどこか壊れそうだった。

何だかひどくアンバランスな子だと思っていると、精算をしにきた客の対応でその場を離れていってしまう。

「何だか、独特の雰囲気持った子ね」

接客している横顔を見ながら素直な感想を述べると、早川もゆきを見つめて頷いた。その視線には好意的という以上の感情が窺える。

「だなあ。だからトエちゃん、人気あるんだけどね」

「ふうん。脩一さんも？」

「な、何を……」

「脩一さん、わかり易すぎよ」

あからさまに好意丸出しの早川に、理恵子は呆れ混じりの苦笑を返す。早川は照れ隠しでタバコをくわえ火をつけようとしたが、すぐに何かに気づいたようにタバコを箱へと戻した。

「あら、お気遣いアリガト」

「いえいえ。貴久に厭味言われたくないんでね」

「理恵子になんか気が遣わんでええねんで、ハヤさん」

空いたグラスや皿を持った榎野が、戻ってきた途端にそう言った。

「ほんつと、アンタむかつくわね」

「そんなん言われたら照れるやん」

「褒めてないっつの」

理恵子と榎野のやりとりに、くすくすと笑う声が聞こえた。

ゆきが接客を終え、すぐ傍まで戻ってきていたのだ。どうやら理恵子と榎野のやりとりをずっと聞いていたらしい。

「まつきーって、やっぱり誰にでもそんななんだね」

「俺様やからな！」

「いや、自慢すんなよ、榎野」

まさしく俺様な榎野の発言に、早川がすかさずツッコミを入れる。楽しそうな三人の会話から、いつもこんな感じなんだろうなと思いつつ、理恵子はもう一度ゆきを窺った。

「トエ、だいぶ客減ったし、今のうちに休憩しときや。俺は後でもらうし」

「サンキュー、まつきー。一杯だけコーヒー飲ませてもらうよ」

不思議なトーンの声。耳ざわりのいい、一度聴いたら頭に残る。

店に入ったときの印象をもう一度持った。そして、それは以前にも聴いたことがある気がどうしてもして、理恵子は必死に記憶を探った。

「ねえ、アナタ、どこかで……」

「え？」

問いかけながら、理恵子はいつのことだったかと記憶のページを早戻しでめくった。

そんなに最近ではない。

多分、まだ自分が歌っていた頃の。

「あ、そうよ！ 律野君のバンドにいた子でしょ？」

ノドの奥に刺さった魚の小骨がようやく取れたような、そんな感じがした。

もつとも、理恵子にとつてあまり嬉しくない思い出までも、引張り出してしまったのだけれど。

ゆきは、理恵子の言葉に絶句していた。

その愕然とした表情から、理恵子はゆきが自分のことを思い出したのだと思つた。

思い出してもらわないと、理恵子としても立つ瀬がない。あんな衝撃的なものを見せつけられたのだから。

「え？ トエ、バンドなんてやつとつたんや？」

「……うん、ここで働くよりももつと前にね」

「へえ、意外。何やってたの？」

「上手かつたわよ、この子。数回しか聴いたことなかったけど」

過去を思い出しながら、理恵子はそこで奇妙なことに気づいた。

もし、自分の記憶が確かなら。

「あれ？ でも、確かり……」

「昔の……！」

疑問を口にしようとした瞬間、思いがけない強い声に遮られた。

ゆきは、感情を押し殺すように俯いている。

「トエ？」

「もう、昔の話ですから」

そう言いながら上げた顔は、今まで以上に作り上げられた笑顔だった。その無機質な笑顔は、ささくれた傷痕のようにじわじわと鈍い痛みを伴っている。

ゆきにとつても、あの頃のことには楽しいばかりの思い出ではなくなっているのだと、理恵子は遅れて気が付いた。

少し意地悪をするつもりが、予想以上に彼女を傷つけていたらしい。

「……そ、そうね、ごめんなさい」

「いえ。私こそすみません。大きな声出して」

「気にしてないわっ！ で、でも、懐かしいわね。律野君、元気？」
努めて明るい雰囲気に戻そうと思つて慌てて次の話題に移る。

ゆきと律野はまるで恋人同士のように仲が良かったことを思い出して、そう言ったのだった。しかし、

「わかりません。会ってないですから」

返ってきたのは、ますますその場の空気を凍りつかせる一言。

ゆきは、無表情で自分で入れたコーヒーをカップに注ぐと、榎野を見上げた。

「ゴメン、まつきー。私休憩もらうね」

「ああ」

榎野もかける言葉がないのか短く了承の言葉だけを吐き捨てる。

奥に引っ込むゆきの背中を三人揃って息を詰めて見送った。

「な、何か、マズイところに触れちゃったみたいね」

「理恵子ー」

「驚いたなあ。あんなトエちゃん、初めて見た」

ゆきが姿を消した途端、三人は同時にそれぞれの思いを溜め息とともに吐き出す。

榎野と早川にしてみれば、笑顔のないゆきになどお目にかかったことがなかったので尚更驚いたのだった。

「おまえ、考えたらわかるやる。昔の話やゆうて話題終わらせてんのに」

「だってえっ！ あの子と律野君、ホントに仲良かったんだもん！絶対彼女だって思ったんだから！」

言い訳する理恵子に、榎野は更に特大の溜め息をつく。

「せやから、おまえはアホやねん、理恵子」

「何よお！」

「そのバンド辞めた理由が、律野ちゆうヤツと上手くいかんようになったからとか思わんのか？」

「……あ、なるほど」

いかにも、「納得です」という表情の理恵子に、今度は早川まで揃って溜息をついた。

そんな二人に理恵子は子供のようにむくれる。

榎野は子供じみた年上の従姉に呆れつつも、彼女の好きなカンパ
リオレンジの代わりにオレンジジュースを出す。

「今日はトエにケンカ売りに来たんか？」

「うるさいわね」

「おいおい、理恵子さんがトエちゃんにケンカ売る理由なんて」

「あるわよ」

早川の台詞を一刀両断して、理恵子はオレンジジュースを一気に
あおった。

ぐびぐびと音の出そうな勢いで飲み干して、タンツ、と叩きつけ
るようにグラスを置く。

「やっぱりなあ。おかしい思ったわ、理恵子が店に来るなんて」

「ったく！ 何であんたはいつつもそうやって人のこと見透かして
んのよ！」

「理恵子の考えそんなことくらい余裕でわかるっちゅうねん。心理
学専攻をナメたらアカンで」

「お、おい、何の話を……」

理恵子と榎野の話に、一人取り残された早川が焦ったように割っ
て入る。話はわかっていなくても、不穏な空気だけは感じていたよ
うだ。

そんな早川に今度は理恵子と榎野が揃って溜息をつく番だった。

「ハヤさん、理恵子は気づいってん」

「気づいてって」

「あの子でしょ？ 貴久の相手」

「なっ、り、理恵子さん……」

そう、理恵子は気づいていたのだ。貴久が誰かと付き合っている
ことを。そして貴久の性格や仕事の性質から、同じ職場のゆきに見
当をつけた。今日はそれを確認しようと思って、店に顔を出したの
だ。貴久がいないときを狙って。

「怖いなあ、女て」

「別に、彼女だって確信持って来たわけじゃないわ」

「でも」

「確信したのは来てから。見た瞬間にわかったわよ。おかわり！」
苛々とグラスを押し遣る理恵子に、槇野はやれやれと新しくジュースを注ぐ。

早川はといえば、未だに状況を飲み込み切れていなかった。

「貴久が、いかにもほっとけそうにない子じゃない」

「で、何や？ 宣戦布告でもしよう思たんか？」

「違うわよ！ そりゃあ、ちよつとは意地悪言っちゃおうかなって思っただけど……」

「『ちよつとは』で、俺には傷口抉つとるように見えたぞ？」

「ああー、もうっ！ うるさいってば！」

確かに、悪気がなかったと言いつてもいい切れない。けれど、理恵子は貴久とゆきを無理矢理別れさせようとか、そんなことを思っただけではなかった。

貴久が、自分を大切にしてくれていると十分に承知している。言葉にするのと陳腐だが、「愛されている」とちゃんと感じている。

だからこそ、そんな貴久が気にかける女性というのが、どんな人間なのか興味を持った。

そして会ってみて一つだけ確信できたのだ。

二人の間には恋愛感情も男女の関係もないのだと。

ゆきは似ているのだ。貴久にとって大切だった存在と。

槇野は知らないだろう。早川ももしかしたら知らないのかもしれない。

けれど、理恵子は知っていた。貴久の大切だった『妹』を。

「……帰るわ」

理恵子は、二杯目のジュースに手をつける前に席を立った。

自分がここにいれば、ゆきは出てきづらいだろうと思っただのだ。

それに理恵子自身も少々罪悪感があり、顔を合わせにくい。

「ええんか、宣戦布告は」

「しないわよ、そんなこと。ま、あとちよつとくらいなら、貴久の

レンタル許してあげるわ」

ふっと、笑みを浮かべてそう言つと、珍しく榎野が驚いたような表情を見せた。

理恵子はそれに少しばかり満足感を得る。が、やっぱり榎野は榎野で、

「何や、変に寛大やな。俺、普通のジュースちゃうもん出したんか？ オレンジ腐つとつたんかー？」

「違つわよ！」

満足感はすぐに潰されてしまった。理恵子はこの一癖も二癖もある男が従弟であることを心底恨めしく思った。

「ジュースはアンタのオゴリね！」

「はいはい」

「あ、理恵子さん、途中まで送つてくよ」

辛うじて榎野に小さな腹癒せをして入り口に向かう理恵子の後を早川が追う。

揃って店を出て行く二人を見送つた後、榎野はぐるりと視線を巡らせた。

視線の先は、奥のスタッフルームのドア。

一度息をついて、ゆっくりと、榎野はそのドアへと向かった。

#9 Bond and Collapse

新年も明け、仕事や学校も始まる頃。

吐く息は白く溶け、ポケットに手を入れたまま通り過ぎる人も多く目についた。

サラリーマンも学生も寒さの所為か足早に行き交っている、そんな人通りの多い交差点の側。

薄闇の帳が下り始めたその時間には、何人ものストリートミュージシャンたちが自慢の歌を披露し始めていた。

ギター一つ抱えて弾き語りする者や、アカペラで歌う者、バンド形式で演奏する者など様々である。

そんな中、ユキの率いる『Weier Schnee』の面々も楽器や機材の調整などを行っていた。

ライブハウス以外では、いつもここでユキたちは路上ライブをしていたのだ。それは、このメンバーになってからは数えきれないくらい行われている。お陰で、この路上でファンになってくれた人もいて、ちゃんとしたライブにまでわざわざ足を運んでくれたりもした。

「あれー？ メジャーデビューまでしたバンド様がないんでこんなところでまたライブするんだろー？」

ライブの準備をしていたユキたちから数メートル離れた場所から、侮蔑と嫉妬を含んだ声が投げかけられる。

思わずリツは立ち上がり、声の主の方を睨みつけたが、すぐ隣にいたユキに腕を掴まれて制された。

「リツ、バカは相手にしないの」「でも」

「ユキの言うとおり。ああいう構ってちゃんは、反応するとつけ上がるからね」

ユキとシユウの両方から言われ、リツは渋々頷いてユキの隣に腰

を下ろした。

それでも、先ほどの声の主はあからさまに貶す言葉を止めようとはしない。その連れであるだろう男も便乗し、二人ですつとユキたちを馬鹿にするような台詞を言い続けた。

「あれでしょー？ どうせ、CDデビューしても大して売れてないから営業しないといけないんでしょー？」

「あ、そっかあ。そうだよなー。所詮あの程度の歌が売れるわけねえもんなあ！」

「そうそう、ボーカルの顔も大したことないし、見た目で売ろうとしても無理じゃん？」

「そりゃそうだよなー！」

わざと聞こえるような声で延々と続けられる中傷の言葉に、曲を聴きに来たと思いき人たちの間の雰囲気も徐々に気まずさを増していく。

リツの性格上、それを黙って聞いていることなどできないのだが、それでも今は我慢しなければいけない理由があった。

嫌味を言い続ける彼らが言うように、『We i e r S c h n e e』はつい数週間前にCDデビューを果たしていたからだ。

芸能プロダクションにも所属し、今では立派な商業ミュージシャンなのである。だからこそ揉め事を起こすわけにはいかなかった。

リツの表情がどんどん曇っていくのを見て、ユキは軽くリツの柔らかな頬を抓った。

「痛っ！ 何すんだよ、ユキー！」

「リツ、うるさい虫はね」

そう言いながら、ユキは愛用のギターを持って立ち上がり、リツの手を引いた。そのまま立ち上がるリツを真っ直ぐに見つめ、ユキは極上の笑みを浮かべる。

「リツの歌で黙らせてやんなさい」

自信に満ちたユキの笑みに、リツは一瞬見惚れたものの、すぐさま不敵な笑みを口元に刻む。

「……了解っ」

リツはそう頷きとマイクを持つ。ヨシノ、シユウと順に視線を巡らせると、それぞれから強い信頼を感じさせる視線が返った。

シユウがカウントを刻む。完璧なタイミングでそれぞれの音とリツの声が重なった。

一瞬で空気が変わる。悪口を言っていた二人組の声は四人の音にかき消され、代わりに『Weier Schnee』の演奏を待っていた人々の表情が綻んでいくのが見えた。

そしてその瞬間、ユキたちは先ほどの無礼な輩の存在など綺麗に忘れ去っていたのだった。

『きっかけ』は、ヨシノだった。

ユキが作ったデモテープをヨシノがこっそりとコピーし、幾つかのレコード会社へと送りつけていたらしい。

そして、『Weier Schnee』の音に興味を持ってくれたその会社の内の一つ　現在所属するレコード会社の人物が、ライブを見に来てくれたのが四カ月前の話だった。そして予想外の話が聞かされたのだ。

「メジャーデビューしませんか？」と。

デモテープを送っていたことを全く知らなかった三人は驚く以前に戸惑った。テープを送った張本人のヨシノでさえ、まさか本当に声がかかるなどとは思ってはいなかったのだ。狼狽えていたくらいだった。

結局何度も話し合いを重ねた末、CDデビューの話が決まった。

ユキはリツの歌さえ作ればいいと思っていたし、リツはユキの歌を歌えればいいと思っていた。ヨシノはこのバンドをずっと続けていきたいと思っていたし、シユウは就職浪人をしていて、今後はどうなるものかと思っていたところだったので方向性が決まったことにひとまず安心をした。

慣れないスタジオでのレコーディングやプロモーション活動、新しい人間関係に困惑しながらも四人は確実に前に進もうとしていることは確かだった。

しかし、必ずしもいいことばかりではないのも当然である。

先ほどの二人のように、やっかみの含んだ中傷などはやはり受けてしまう。

デビューしたからといっても、まだ四人は新人だ。鳴り物入りでデビューしたわけではないから、仕事だってそれほど多くはない。

だからプロモーションの意味も含んだこの路上ライブも、ある意味あの皮肉の通りなのだ。

別に何を言われようと構わない。

そうユキは思っていた。

誰が何をどう言っても、自分の歌を最高に歌いあげてくれるリツがいる。

そして、自分を信頼して支えてくれるシュウとヨシノがいる。

レコード会社が紹介してくれたプロデューサーも、ユキの望む音楽を理解してくれた。ユキの描く音楽の世界を、更に広げようと親身に話を聞いてアドバイスをくれる。

だから構わない。

四人で作り出す音に浸れる瞬間が、何よりも居心地がよく、しかもそれを形にして世に送り出してくれるという人たちがいるのだから。

だから、自分は最高に幸せ者なのだ、そう心から思う気持ちを音にのせ、ユキはリツの為にギターを奏で続けた。

次のCDの告知をし、ライブがお開きを迎える頃、『Weier Schnee』を担当するマネージャーの須藤が姿を現した。

まだ二十代後半の青年だったが、顔は少々童顔でメンバーと並んでいてもそんなに違和感がない。それでも明るく社交的な人柄且つ

仕事はしつかりとこなすところから、メンバーたちから兄のように慕われる存在となっていた。

「お疲れさんー。来るの遅くなつてごめんねー」

「いいつすよ。須藤さんいてもいなくても一緒だし」

「あ、シユウ君そういうこと言う？ せっかく美味しいモツ鍋屋さん連れてってあげようと思つてたのに」

「あー、嘘嘘！ 須藤さんいなくてめっちゃ困つたよー！」

「シユウってホント現金だよなー」

ライブの後の高揚感も手伝つて、メンバーの笑い声がいつも以上に高らかに響く。

須藤が少しだけ耳にした今日のライブの感想を述べ、それにますます全員の表情が、明るく彩られた。

和気あいあいとした雰囲気、須藤が予約を入れた店へと向かう為に移動を始める。

彼らの間には、ずっと幸せそうな笑みが絶えることはなかった。

その様子を少し離れた場所から面白くなさそうに見つめ、舌打ちを洩らす者がいた。

ライブ前に絡んできた二人組だ。

彼らも、ユキたちと同じく路上やライブハウスで活動するミュージシャンだった。そして、ユキたちよりもその活動歴は長い。

当然、ユキたちのデビューは苦々しく思つていたし、報われない自分たちが腹立たしくもあつた。

アマチュアのミュージシャンたちの中にはユキたちの成功を素直に祝福する者も確かにいるのだが、やはり妬む者たちもいるのだ。

この思いは、自分たちだけのものではない。

そう言い訳のように思い込む彼らの頭の中は、既に暗く澱んだ闇に侵食され始めていた。

遅い夕食を終え、メンバーは須藤が連れてきてくれたモツ鍋屋を気分良く後にした。

リツはユキに支えられながら、たどたどしい足取りである。

「りっちゃん、大丈夫？」

「うーん、何とか……」

心配そうに眉をしかめるヨシノに、リツは無理やり笑みを浮かべた。けれどそれは、かなり力ない。

リツはアルコールに弱い。それこそ、一口飲んだだけでも真っ赤になってしまうほどだ。

だからいつも飲まないのだが、今日はヨシノの頼んだチューハイを自分の頼んだジュースと間違えて飲んでしまったのだ。お陰で今現在、この様である。

「タクシー拾おうか？」

須藤が気を利かせてそう提案するが、ユキはそれを申し訳なさそうに断った。

「リツ、車にもすぐ酔うから。近いですし、歩いて送っていきますよ。その間に少しは気分も楽になるでしょう」

「そうか。気をつけてね。何かあったらすぐに電話して」

「はい。ありがとうございます」

「須藤さん、ごめん」

青褪めた顔で謝罪を洩らすリツの頭を、須藤は「気にするな」と優しく撫でる。

次の予定を簡単に確認してから、ユキとリツは他の三人と別れた。シユウはヨシノを送っていくのだろうし、須藤はまだ仕事が残っているのでまた会社に戻るのだろう。まばらに行き交う車のヘッドライトに照らされる後ろ姿を見送ってから、二人は歩き始めた。

冷たい木枯らしに、リツは少し身を竦める。ユキはそれに気付いて、寄り添う体をほんの少し近づけた。

「寒い？」

「ダイジヨブ。あー、次からもうちよつと気をつけないと……」

「リツって見た目は酒豪そうに見えるのにねー」

「酒豪そうな外見ってどんなんだよ」

ユキがしみじみと呟くのに、リツは思わず吹き出す。それと同時に頭に響く痛みにも、顔を顰めることになってしまった。

それでも、すぐ隣にある温もりに、すぐさま表情が和らぐ。

「あ、そうだ。ついでに見てく？ 出来立てはやはやの新曲の歌詞」

「当然でしょ。でも、さすがにこの時間に歌ったら近所迷惑かな。」

リツの声は通るからね」

くすくすと二人で顔を見合わせ、笑い合った。

また、頭に響く。それでもリツは笑う。

この幸せな時を、噛みしめて。

しかし、その至福に満ちたときはすぐに崩れ去った。

「公衆の面前でいちやついていいのー？」

「そうそう。ゲーノージンはそういうところも気をつけなくちゃいけないんじゃないですかー？」

不意に投げかけられた言葉に、二人の足が止まる。

前方の街灯の下、二つの人影がある。あのライブ前に悪口雑言を放った二人組だった。

ユキとリツの表情が揃って不快感に歪む。しかし、彼らを相手にするのは得策でないことも二人は承知していた。

「リツ、行こう」

「うん」

無視を決め込み、足早に二人組の脇を通り抜けようとする。しかし、当然のように片方の男がユキの肩を掴んで引きとめた。

「あれー？ 無視とか良くないでしょー？」

「そうそう。どんな時でも営業スマイルしとかないとねえ？」

明らかに手出しができないとわかっていて、二人組は馬鹿にするような口調を続けていた。

ユキは鋭く睨みつけると、それでも乱暴にならない程度に男の手を振り払う。意外にも男はそれ以上ユキを捕まえようとはしなかつ

た。しかし、

「これから二人でホテルですかー？ それともお部屋でー？」

「よくやるよなあ。酔った振りして男誘うなんて、男っぽくしてるクセに随分な淫乱だねえ」

代わりに寄越されたのは、そんな蔑みの言葉。

咄嗟にリツは隣のユキに手を伸ばしたが、遅かった。

ユキは、片方の男の胸倉を掴み上げ、街灯の柱に押し付けていた。「誰のこと言ってるんだよ」

普段は滅多に出すことのない、低く押し殺した声。

掴まれている男は一瞬怯んだが、それでも侮蔑の視線も言葉も辞めなかった。

「誰って、決まってるでしょ。『Weier Schnee』の自慢のボーカリスト様だよ」

「なあ、どうやって会社に取り入れたのー？ やっぱりさ、君とベースの女の子で会社のお偉いさんにご奉仕でもしたわけー？」

もう一人の男も下卑た笑みを浮かべながら、下衆な問い掛けをリツに向ける。そしてまだ足元のおぼつかないリツの腕を取って引き寄せようとした。

「リツに触るな！」

ユキが掴んでいた男を放るように放し、リツに近づく男を捕まえよう手を伸ばす。が、その前に掴まれていた男がユキの腕を捕え、強く引いた。ユキがバランスを崩す。

それに合わせて、男の拳がユキの腹に叩き込まれた。ユキの口から、苦しい呻き声が洩れ、その場に崩れ落ちる。

「ユキ！」

「カッコつけてんじゃねえよ！ テメエらの音楽なんか誰も聴いちやいねえのに、デカイ面しやがって！」

それまで溜まっていた鬱憤を一気に爆発させたように、男は苦しむユキの体を引き上げ、罵倒しながら更に殴りつけた。もう一人の男は、邪魔されないようにとリツを羽交い絞めになっている。

「やめる、バカ！ 放せ！ ユキっ！」

リツは必死で男の腕から逃れようとするが、力では敵わずにただじたばたともかくことしかできなかった。

ユキも何とか抵抗をしようとはしているのだが、相手の力の方が強いのだろう。ほぼ一方的に暴行を加えられていた。

そして、悪夢の瞬間は訪れた。

男の渾身の一撃が、ユキを襲う。そのままユキの体は勢い余って車道へと転がり出てしまった。丁度走り抜けようとしているセダンの、その前へ。

耳障りな甲高いブレーキ音の後に、鈍く何かがぶつかる音が聞こえた。

「ヤベ！」

「オイ！ 行くぞ！」

我先にと走り出す男二人組のそんな声も、走り去る足音もリツには聞こえていなかった。

「ユ……キ……？」

ハザードを出して端に寄った車から、壮年の男性が慌てた様子で跳ね飛ばされたユキへと駆け寄る。

すっかりしろ、と大きな声で呼び掛け、携帯電話で救急車を呼ぼうとしているその様子をしばらく茫然と見つめてから、リツは弾かれたようにユキの側へと駆けつけた。

「ユキ！ ユキ！」

「駄目だよ！ あんまり揺すっちゃ！ すぐ救急車呼ぶから、君も落ち着いて！」

車の持ち主は冷静にリツを諭すが、リツには到底無理な注文だった。

何度も名を呼ぶ。応える声はない。

地面には、真っ赤な水溜りができ始めていた。

混乱するリツの頭の中に、別れ際の須藤の言葉が過ぎる。

『何かあつたらすぐに電話して』

震える手で携帯を取り出し、短縮ダイヤルで須藤の番号を呼び出す。それだけの行為なのに、かなりの時間を要した。

短いコール音の後、須藤の声が耳に届く。リツはただ叫んだ。

「須藤さんっ！ ユキが……っ！ ユキが！」

どうした、何かあつたという須藤の問い掛けにもリツは答えられず、懇願するように繰り返すしかできなかった。

「ユキを、ユキを助けて……。ユキ……。」

そして、リツの祈りの声は、『今』もまだ聞き届けられてはいなかった。

#10 Trueness Name

『Anastasia』と書かれた赤銅色の看板に向けられているスポットライトの明かりが消える。

それは閉店を示すサインだった。

僅かに残っていた客を店の外まで出て見送ると、榎野は奥のスタッフルームに向かった。

今日はゆきが休みの日で、貴久と榎野の二人だけ。数日前から、この日が来ることを待ち侘びていた。

榎野には、どうしても貴久に訊きたいことがあったからだ。

「店長ー、終わったでー」

「おう。お疲れ」

まずは様子を窺うかのように、いつもと同じように話し掛けた。

貴久は売り上げの計算を始めている為、顔も上げずに返答をする。そんな貴久の背中を見つめながら、榎野は変わらぬ口調で切り出した。

「なあ、店長」

「何だ？」

「トエって何モン？」

「『何モン』ってな……」

貴久の電卓を打つ手が止まり、苦笑が漏れる。

何者と訊かれても、貴久には答え様がなかった。

実のところ、貴久は榎野が思っているほどゆきを知っているわけではないのだ。

「理恵子がトエのこと知ってたけど？」

「そりゃあ、スタッフの話くらい家でもするからな」

「せやなくて。大学時代の話」

「大学？」

「理恵子、軽音入ったやろ？ その後輩のバンドにトエがおっ

たつて」

初めて聞く話に驚きはしたものの、貴久にはそれよりも気になったことがあった。今の話からいくと、理恵子がゆきに会ったことになるのだ。

そんな話は、理恵子からもゆきからも聞いていなかった。

「理恵子、ここに来たのか？」

「こないだ店長がおらんかったときにな」

「……そうか」

理恵子に気付かれるような素振りを見せていないと思っていたが、やはり女性はこういったものの勘が鋭いらしい。

浮気なんて一生できないなど、貴久はまた苦笑を零した。

「バレてるて、気づいてたんか？」

「バレるなんて人聞きの悪い言い方するなよ。俺とゆきの間に疚しいことなんてないんだから」

言い訳だとは思いつつ、貴久はそう続けた。周りから見たら、不倫以外の何物でもないと思う。

けれど、貴久はどうしてもゆきを放っておけなかった。

ひどく不安定で、危うくて、思わず手を差し伸べずにはいられない。

あの日、大丈夫だと浮かべた笑顔が、いつまで経っても頭の中から消えなかった。

それは、最後に見た『幸緒』の笑顔とよく似ていたから。

しかし、そんな話を榎野にするつもりはなかった。

したらしたで、怒られそうな気がしなくもないのだ。

そんなことを考えている貴久をよそに、榎野は話を進める。

「ま、とりあえずそれは置いといて。トエがあんななん、店長やつたら何か知つとるんちゃうんか？」

「……大学は理恵子と違ったと思うけどな。同じだったら、履歴書見たときに何か思ったはずだし」

面接に来たゆきを見て、そして履歴書を見て、確かに驚いた記憶

はあった。

けれど、いくら驚いていたとしても、理恵子と同じ大学に通っていたのなら、意識の片隅にくらいその記憶が残っているだろう。

「いや、せやから大学は違うねんて」

「え？ でも、サークルの後輩のバンドだろ？」

「何か知らんけど、元々別の大学の子らも一緒にやってたらしいで。そんで理恵子の話によると、その後輩の律野某のバンド、なかなかヴォーカルが決まらんかったんやて。で、理恵子に半分決まりかけたときに、突然他大学メンバーの一人が連れてきたんが、トエやったって」

榎野は理恵子が来た日、ゆきの様子が気になって、改めて理恵子に昔何があつたのかを聞いたのだ。理恵子は渋々ながら、自分の軽音部時代の話をしてくれた。

榎野の話す内容を聞いて、貴久はそういえばと以前に理恵子に聞いた話を思い出す。

『後輩にね、すごくいい曲を作る子がいて、その子の歌を歌いたかつたんだ。けど、その子には私の歌じゃ納得してもらえなかった。自信失くしたなー。だから卒業と同時に歌うことを辞めちゃったの』
懐かしそうに、けれど少し悔しさを滲ませて理恵子は微笑っていた。

貴久が聴いた限りでは、理恵子は十分に歌も上手かつたし、声も綺麗な方だと思う。

それでも認められなかったということは、根本的にその後輩の求めていたものを理恵子が持っていなかったということだろう。

貴久は部分的にかいつまんでそのことを話す。

「へえ、ソレは初耳やな。アイツ結構プライド高いから、シヨックデカかつたんやろなあ」

「しかも、理恵子はその後輩のこと、好きだったみたいだし」

「そうなんか!？」

途端に喜色を浮かべた槇野に、貴久は少しばかり喋り過ぎたと後悔した。これをネタに、槇野は理恵子をからかうだろことが予想できたからだ。

「あくまでも俺がそう思ったただだよ。理恵子には言うなよ？」

「わかってるて。そおかあ、理恵子はトエにヴォーカリストの地位も惚れた男も取られたんかあ」

「槇野」

「じよ、冗談やて！」

釘を刺されても面白がることを辞めない槇野に、貴久の低い声と鋭い視線が飛ぶ。

普段は穏やかな貴久だが、実は結構気が短く、更に言うと腕っ節のほうもなかなかのものなのだ。

身の危険を感じた槇野は慌てて誤魔化すように笑い、態度と話題を改めた。

「で、でもな、理恵子が言うには、全然別人みたいやて」

「別人？」

「俺も話聞いてびっくりしたわ。あのトエが、歌てる理恵子に突然『違う』って言うて、歌止めたらしいから」

槇野はいまだにその話が信じられないでいた。

自分の知っているゆきは、絶対にそんなことはしない。

いつも嘘のように柔らかな微笑を控えめに浮かべた、おとなしやかなゆきしか知らないのだ。

それは貴久も同様だったのか、しばし呆然としていた。

「……それ、ホントにゆきか？」

「やる？俺もそう言うたんやけど、理恵子は『あんな声、聴き間違うはずがない』って。アイツ、耳だけは確かやからな」

確かに理恵子は耳がいい。音楽が好きで、歌うのと同時に沢山の曲を聴き漁っていたからだろう。

世の中にはよく似た声質の歌手もいるのに、それらを聴き間違う

ことなど皆無に等しいほどだ。

槇野の言葉に納得しつつ、貴久は二人で会うときのゆきのことを思い出した。

いつも、遠くを見ているゆき。

見上げる灰色の空に、風に舞う白い花に、誰もいない並木道の向こうに、誰かの姿を見つけて足を止める。

いつだって、ゆきの心は『どこか』を彷徨っていた。

その原因によやく辿り着ける。そんな思いが胸を過ぎる。

「理恵子の話がホンマなら、トエ、何で今みたいになってもうたんや？」

貴久が無言で考え込んでいるのにも気づかず、槇野は眉間に皺を寄せながら呟いた。

確かに今までもゆきに対する違和感は持っていたけれど、ここまで疑問に思いはしなかった。

けれど、理恵子の話を聞いた今、ゆきの違和感は危機感にすら変わってしまった。

理恵子の話の中のゆきは、いつもメンバー達と楽しそうに笑ってじゃれ合って、怒って。それが当たり前だったらしい。

ならば、今のゆきは『誰』なのだろうか？

自分たちの知る『ゆき』は、一体。

「……なあ、トエのこと何とかならんのか？」

槇野のどこか頼むような口調に、貴久は自分の考えを打ち切り頷いた。

「わかってる。……それに、おまえも気分悪いよな。自分の従姉の旦那が目の前で浮気したら」

気づいているのに気づかないフリをしてくれている槇野に、貴久は心の中で感謝していた。そして同時に、心苦しくもあったのだ。

口では悪く言っているけど、槇野にとって理恵子は大切な従姉なのだから。

しかし。

「そんなんどうでもええねんて！」

突然、榎野が堪りかねたように声を荒げた。普段は飄々としているのに、いつになく真剣に怒っている。

その怒りは、貴久に向けられているわけでなく。

「確かに理恵子のこと考えたれとは思うけど、それ以前にト工見とつたら腹立つねん！ 何であんな辛気臭い顔してるんか俺は知らん！ けど、ハヤさんやって心配してるちゅうのにあいつは……！」

「榎野？」

「……ダチなら、礼なんか言うより相談せえちゆうねん」

友人だと思ふ相手から頼りにされない自分自身の不甲斐なさ。

見守ってやるのも友達の役目だと思いつつも、少しくらい話してくれてもいいだろうと、榎野は思ったのだ。

確かに付き合いは貴久よりも浅いし、ゆきは自分のことをほとんど話さないから、あまり深くは知らないけれど。

それでも、もう少しくらいは、と。

「……おまえ、結構可愛いところあるんだな」

意外な榎野の一面に、貴久が感心したように微笑む。榎野は決まり悪そうに、視線を逸らした。

「うるさいで、店長」

「ははは。ま、そんなに心配するな。近いうちに俺もどうにかしようと思っただけだ」

「どうにかて？」

「それはまたな。榎野、コーヒー飲むか？」

「……飲む」

「よし、ちよっと待ってるよ」

貴久はカウンターへと続くドアを開ける。

そして、コーヒーの準備をしながら、理恵子に知られていることがかえって救いになるなと小さく笑みを浮かべ、一人言ちた。

それとは対照的に、いつになく拗ねた子供をあやすような態度の貴久に、榎野は少しばかり不貞腐れていた。

八つ当たりのように、目の前のデスクをガンツと蹴る。

次の瞬間、バサバサと音を立ててデスクの上に積まれていた書類が崩れて散らばっていた。

貴久は几帳面なくせに整理が下手なのか、デスクの上がいつも乱雑だったのだ。

「あっちゃー、店長、かんにんな！」

貴久が戻ってくるまでに直してしまおうと、慌てて書類を掻き集める。その右手の指先に、榎野は奇妙なものを見つけた。

一枚の履歴書だ。少し丸みを帯びた女性的な文字が、整然と並んでいる。

「……何やこれ。どういうこっちゃ？」

住所。電話番号。学歴。

「ごく普通の履歴書だが、ただ一つだけおかしかった。

「『戸枝^{トエタリツカ}六花』？」

榎野の知らない名前が、そこにあった。

呆然としつつ、その履歴書を手に取り、もう一度見直す。しかし、何度確かめても名前は『ゆき』ではなく『六花』だ。

背後でドアの開く音がする。貴久が戻ってきたのだろう。

榎野がしゃがみ込んでいるのを不思議に思ったらしい貴久が名前を呼んだ。

「……店長、戸枝六花で、誰？」

そう問われるのに、貴久は榎野の手元に気付いた。そこに握られているのは、『戸枝六花』の履歴書だ。

誤魔化しも効かないと理解し、静かに答える。

「『ゆき』の、本当の名前だよ」

11 Snowy Field Promise

数時間に一本しか走っていない特急列車が、ゆっくりとした速度で吹きさらしのプラットフォームへと滑りこんでくる。

停車した車両から吐き出される乗客はまばらで、誰もが寒さに無言になりながら跨線橋を渡り、いくぶん寒さの凌げるはずの駅舎内へと足を急がせていた。

その乗客の中に、大学の冬季休暇を利用して帰省してきたリツとユキの姿もあった。

二人は荷物を抱えたまま、駅のすぐ傍にあるバス停へと向かい時刻表を確認した。が、生憎と次のバスの時間まで五分以上ある。

一時間に一本の割合でしか走っていない田舎の路線バスでは、それも仕方のないことだった。

「どうする？」

「うーん」

時間を潰す方法はあまり多くない。というよりも、ほぼ皆無に近かった。

近くにアミューズメント的なものもないし、手頃なカフェや喫茶店などもほとんどない。

ユキの問いにしばらく首をひねっていたリツだったが、ふと思いついたように満面の笑顔になった。

「ユキ！ 学校行こう！」

「学校って、峰高？」

二人の通った母校 白峰高校の略称を挙げると、リツは嬉しそうに大きく頷く。

すれ違っただけだった高校時代だったが、それでも共に過ごした母校を懐かしく思う気持ちには変わりがないのだろう。

それに、今はもう二人でいることができる。辛かった思い出も、今では思い出の一つとすることができるのだ。

ユキは「わかった」と笑みで答え、二人は十分ほど離れた先にある母校へと向かって歩き出した。

かつて二人の通った高校のグラウンドは、一面真っ白な雪に覆われていた。

年末で部活動も行われていない所為か、踏み荒らされた痕跡もない。職員もいないらしく、辺りはしんと静まり返っていた。

「ユキ！ 雪ー！」

リツはその白銀の絨毯が気に入ったのか、蹴散らしながらグラウンドを駆け出した。その様子に、少し前にシユウに「仔犬のように駆けまわるリツ」を説明したことを思い出し、ユキは柔らかく目を細めた。

「それはどっち？ 俺を呼んでるの？ それとも雪積もってるのを主張したいの？」

「どっちも！」

無邪気な笑顔が返るのに、思わずユキは小さく吹き出してしまった。

二人が今大学の関係で一人暮らししている土地では、あまり雪が降らない。降ったとしても積もることなど皆無に等しいのだ。だからここまでの雪景色を目にするのは本当に久しぶりで、リツのテンションが上がるのも無理はないと思えたのだが、それにしてもわかりやすい。

ユキの笑いに、バカにされたと思ったのかリツがムツとして頬を膨らませた。

「笑うなよ！ 好きなんだから仕方ねえじゃん！」

そう反論するリツに、ユキはちよつと意地悪な気持ちを駆り立てられてしまった。

性格が悪いと思いつながら、似たような問いをまた返す。

「それもどっち？ 『俺』？ 『雪』？」

一瞬でリツの顔が真っ赤に染まった。なかなか次の言葉が出てこ

ずに、しばらく口をパクパクさせた後、ようやくリツは、
「ゆ、『雪』に決まってるんだろ！」

乱暴な口調で何とかそう返した。

そんな可愛い反応をされるとますます苛めたくなくなってしまふのがユキの性格である。

「そうか、『俺』か」

「違おう！ ユキヒロじゃなくて『雪』！ スノーの方！」

「いやあ、愛されてるなあ、俺」

「違っつっつてんだろ！」

必死に弁解するリツに、ユキは更なる意地悪を思いついてしまった。突如真面目な表情を作り、ぽつりと呟く。

「俺も好きだけど？」

「え？」

咄嗟の反応ができないまま、リツの思考回路はフリーズしてしまっ
った。

ユキの言葉の意味はわかるけれど、何と答えればいいのかわから
ない。

戸惑いと焦りと、そして喜びが生まれる。

が、次の瞬間にユキがニヤリと人の悪い笑みを浮かべて付け加え
た。「『雪』を」と。

顔どころか全身の体温が一気に上昇するのを、リツは自覚した。

視線を遠くの雪化粧した山に向け、恥ずかしさを誤魔化すように笑
って取り繕おうとする。

「あ、ああ。『雪』、ね……」

「期待した？」

「してないっ！」

からかわれたとわかったリツの怒鳴り声が雪のグラウンドに響く。
ユキはリツの反応の全てを愛おしく思いながらも、声を殺しながら
笑い続けた。

反対にリツはムツとしているが、その表情はどこか安心している

ようにも見える。

それをわかつているからこそ、ユキは本気で気持ちを伝えようとは思わないのだ。ユキが想いを告げるとしたら、それはリツが自分に想いをぶつけてきた時だと決めている。それは、再会した時からずっと決めている自らへの誓いだった。

「そっぴやさ」

「何だよ！」

「リツの名前」

「名前？」

ようやく笑いをおさめたと思ったユキが話し始めた話題が、あまりにも突拍子がなかった為にリツは一瞬怒りを忘れ、代わりに訝しげな表情を浮かべた。

ユキにしてみればそれは予想通りの反応で、リツの上手い扱い方に内心満足しながら話を進める。

「『六花』って『雪』のことだって知ってた？」

「え？ そうなの？」

「ほら、雪の結晶って六つ片のある花みたいでしょ。だから」

「へえ、さすが雑学大好きっ子……」

見事にからかわれたことを忘れて感心さえするリツに、ユキは優しい笑みを浮かべながらも再びからかいモードへと移行した。

「リツはそんな儂げなキャラじゃないよな」

「るせえっ！」

またしてもユキの予想した通りに怒りの声を上げるリツ。そんな風に一挙一動を予測できるほど自分はリツを理解しているのだと思うと、可笑しくもあり嬉しくもあった。

だからますます自然と笑みが零れるのだが、リツにとってはそんなユキの笑いがバカにされているようにしか思えないのだろう。ふてくされたように口をへの字に結んで、広がる雪景色を見つめていた。

そんなリツの姿に、ユキは先ほど口にした言葉は本意ではないと

伝えたいような気持ちになる。本当は純粹で真っ白なリツにぴったりの名前だと思っていると。

けれど、それはまだ言わないでおこうと考え直した。いつかきくと、リツにそれを伝えるに相応しい時が来るだろうと思うから。

そして、そんなリツの見つめていると、ふと頭に浮かぶ言葉があった。

「『Song for Snow』、ね」

リツが、ユキの曲につけたタイトルだ。自分たちのバンドの、メジャーデビュー二枚目になる予定の曲でもある。

奇しくも、ユキが『雪』をイメージした曲に、リツはそう名付けた。ユキは一度もそのイメージを伝えていないというのに、だ。

いつもそうだった。ユキはリツに自分の曲のイメージをほとんど伝えることがない。それなのにリツは、ユキが思い描いた景色を見事なほどに歌に乗せていく。

だから、手離せない。どんなことがあったとしても、二度と離れるつもりはなかった。

「ユキ？」

一言呟いたまま何も言わなくなったユキに、リツは疑問の表情を浮かべて振り返った。

どこか不安げにも見えるその表情に、ユキは安心させるように微笑んでからまたしても意地の悪さを発揮する。

「俺とリツのための歌？」

「バツ……！」

またからかわれたと思ったリツは、怒ったようにユキの胸を拳で叩いた。しかし、その痛みすらユキには心地よく、零れた笑みは温かく優しいものになった。

「いいんじゃない？ そういうことで」

思いもよらないユキの穏やかな笑みに、リツはこみ上げる想いを抑えきれなくなる。それを誤魔化すように、くるりとユキに背を向けた。

「……ま、いいけど、な」

そっけなく答える。それだけしか言えなかった。

それが、今のリツには精一杯なのだ。

そんなリツに、ユキは心の中で小さく謝った。

(少しだけ、許してね)

リツには聞こえない謝罪の後、そっと白銀の中に佇む小柄な身体を背中から抱き締める。一瞬、リツが驚きと緊張で身を震わせた。

けれどすぐにその緊張を緩める。

「……早く書いてね、詞の続き」

「わかってる」

「できたら俺に一番に報告すること」

「わかってるって」

「で、その場で歌ってもらうから。俺のギターで」

「死んだってユキ以外のギターで歌うかよ……」

ユキの腕の中、リツは涙声でそう笑った。

そして、覚悟する。

もう、無理だ。

これ以上、ユキへの想いを抑えつけることなど、無理なのだと痛感した。

(歌おう。ユキに……)

この『Song for Snow』はユキのための歌。そして、リツ自身のための歌だった。

だから歌って伝えようと決めた。

今まで降り積もってきた、根雪のような想いを。

今なお降り続け、積もるばかりの想いを。

そう固く決意して、背中に感じる愛しい温もりに身を委ね、リツは瞳を閉じた。

ユキはただ、そんなリツを静かに見つめ、包み込むように優しく抱き締める。

そんな二人を知るのは、静寂を象徴するような白銀だけだった。

そして、その一週間後。

出来上がったリツの詞は、誰にも聴かれることなく机のひきだし奥深くに眠ることとなる。

#12 Congenial Request

誰もいない一人きりのリビングで、理恵子はぼんやりと膝を抱えてソファーに埋もれていた。

時計の針はとづくに一日の終わりを告げていたけれど、なかなか眠気は訪れそうにない。安眠効果のあるハーブティーを飲んでみたところで、一向に効果の現れる気配はなかった。

貴久の帰りは今日も遅い。話し相手すらない状況では、ひどく時間が経つのも遅く感じるのだった。

ただ座り込んでいるのも落ち着かなくて、もう一杯お茶を淹れてみたりもするのだが、それでも時間は進んではくれない。

時計の針の音すら気になってしまい、紛らわせるためにかなり落としたポリウムでラジオの電源をオンにした。適当にチャンネルを合わせると、邦楽のポップスが流れ出す。

それにようやく僅かな安堵を得て、理恵子はソファーへと仰向けに寝転がった。

やはり、音楽が好きなのだ。

かつて熱中したほどではないけれど、音楽は自分に安らぎを与えてくれる物の一つであることに変わりはなかった。

「律野君、かあ……」

流れるささやかなメロディーに誘われるようにふと思い出したのは、三つ年下の穏やかな笑顔の後輩。

理恵子は、彼のことが好きだった。

彼の作った歌を歌いたいと思った。彼と一緒に音楽をやりたいと彼の曲も、ギターも、声も、全てが好きだと思った。

もっとも今思えば、その想いは律野自身というよりも、過分に『彼の音楽』という部分に占められていたように感じる。それほどに、当時の理恵子は音楽を愛していた。

だからこそ、律野が選んだ少女の存在はいつまでも心の底から消

えなかったというのに。

「……あの子、律野君と別れちゃったのか」

つい数日前に貴久の店で出会った、『ゆき』と名乗る少女の儂げな笑顔と、かつて律野の隣で屈託なく笑っていた少女の笑顔が上手く重ならない。

律野の隣で、誰よりも自然にいた。

律野の歌を、誰よりも理解していた。

律野に、誰よりも大切にされていた、少女。

『すみません、理恵子先輩』

あの屈辱の日、律野は理恵子をスタジオの外に促し、深々と頭を下げた。

それは理恵子にとって、彼女が歌い出した瞬間から予想がついていたことだった。

『俺は、アイツが歌うための曲しか書けないんです』

真っ直ぐに、何の躊躇いもなく言っただけの律野が、恨めしいと同時に羨ましかった。

彼ら二人は、きっと音楽の神の祝福を受けているのだろうとそう思ったから。

『誰が何と言おうと、俺の曲は、アイツ以外には歌って欲しくないんです』

わかっているわよと、強がりでもなく、素直にそう言えた。

律野のギターと曲、そして彼女の歌は互いに不可欠なのだと思わなかった。思い知らされた。

自分にはあんな風には歌えない。そう認めざるをえないほど、決定的に。

そのショックはかなりのもので、帰ってから散々泣いたりもしたけれど。

「……でも、あの子の歌好きだったけどな」

当時はまだ悔しさが先に立って、そんな風に言葉には出来なかった。

けれど、あの時、不覚にも聞き惚れてしまっていたのだ。

そんな自分がまた悔しくて、結局それが音楽を辞める一番の原因にもなってしまった。

それを後悔はしていない。けれど、自分が歌を辞めるきっかけとなった彼女までもが歌っていないというのは、少しばかり納得できなかった。

「もう、歌わないのかしら」

律野と離れて歌を辞めたのなら、自分と同じようにもう歌う気はないのだろうとは思う。

なのに、どこか違和感が拭えない。

あの二人の間には、傍から見てもはつきりと目に見えそうなほどに確かな絆があった。なのに、簡単にそれが断ち切られるとは思えなかった。

そして、それ以上に。

「『ゆき』ってどうして……」

それは『律野』の名だ。彼女の名前ではない。

彼女自身が律野を『ユキ』と呼んでいたのだ。なのに今はどうして自ら彼の名を名乗るのか。

考えれば考えるほど、謎は深まるばかりだった。

『では次のリクエストナンバーは』

ラジオから、陽気な男性パーソナリティーの声が届く。

考え込んでいた理恵子の耳にははつきりと聴き取れなかったが、一瞬耳を掠めたバンド名に、思わずラジオの方へと振り向いてしまった。

「今、『Weier』って言った？」

答える人はいないのに、問いかけずにはいられなかった。

既にパーソナリティーは曲紹介を終え、前奏が始まっている。理恵子は立ち上がり、ラジオのボリュームを少し上げた。

聴こえてくるのは、繊細なギターのアルペジオ。それにベースとドラムの音が重なった次の瞬間、忘れられない歌声が溢れ出した。

知っている、曲だった。何度も生で聴いた曲だ。自分が歌ったことだってある。

理恵子自身は知らなかったけれど、律野たちのバンドはメジャーデビューをしていたのだった。

「だったら、尚更何で……」

わからないと、理恵子は呟く。その間にも、理恵子のよく知る、歌いたくてやまなかつた律野の曲は流れ続けていた。

茫然とラジオの前で立ち尽くしていた理恵子は、曲がフェイドアウトしていても微動だにできなかった。

『はい、お聴き頂いたのは、「Weier Schnee」で「Unstoppable wish」でした。さて次は』

明るい調子のまま、パーソナリティーが番組を進行させていく。

それでもなお、動けずにいた理恵子の耳に、不意に硬質な電子音が響いた。

時計を見れば、既に時刻は午前一時を回っている。こんな時間に非常識なと思いながらもディスプレイを覗いた。そして、そこに表示されている名前と番号に更に眉を顰めながらも受話器を取った。

「……何よ、こんな時間に」

『悪い、理恵子。頼みたいことあんねんけど』

自然と刺々しくなる理恵子の声音に、毒舌の従弟にしては珍しく殊勝な言葉が返った。

大体、槇野が理恵子に電話をしてくること自体が稀なのだ。その上で頼みごとなどとなると、晴天の霹靂といっても過言ではなかった。

「頼みたいこと？ まともな頼みごとでしょうね？」

『当たり前やる。おまえにとっても悪いようにはせえへんから』

そう言われて、ピンと来るものがあった。

これは、間違いなく、あの少女が絡んでいることだろう。

「とりあえず、話は聞いてあげるわよ」

『スマンな。助かるわ。んで、頼みいうんは』

素直に礼を述べる槇野を多少不気味に思いながらも、その頼みごとの内容に耳を傾ける。

聞きながら、少しずつ理恵子の表情には笑みが浮かんでいた。

「……アンタの考え、賛成してあげるわよ」

十数分の会話の後、理恵子はそう締めくくって受話器を置く。

一生のうちに一度あるかどうかという意見の一致に、理恵子はくすりと小さな笑みを零した。

知らず生まれていた安堵感に、理恵子の口から欠伸が洩れた。

どうやら安らかな眠りを手に入れられそうな予感を受け、理恵子はラジオを消し、部屋の灯りも落としてベッドに潜り込んだ。

13 Dead - end Tomorrow

悪夢のような日々は、終わらない。

病院からの帰り道、シュウは落ち込んでいるヨシノを誘って小さなコーヒーショップへと向かった。

ユキの事故から一週間。

奇跡的に一命は取り留めたものの、未だユキの意識は回復の兆しを見せなかった。

毎日病院に通っているが、いつも全く様子の変わらないユキの姿に落胆する。

外傷がかなり回復しているだけに、その姿は本当にただ眠っているかと思えない。今にもその瞼が開きそうな気さえした。

だからこそ逆に、今日こそは、ユキの笑顔を見られるのではないかという期待は、一日ごとに色褪せていった。

そして、リツは。

「ねえ、シュウ。リツちゃんどうにかならぬのかな？」

「そうだな。あれじゃリツの方が先に参っちまう」

ヨシノの問い掛けに答えながらも、シュウ自身にも良い案など全く浮かばなかった。

代わりに思い浮かぶのは、日に増すごとに顔色の悪くなっていく、リツの表情。

目を覚まさないユキの元にリツは毎日通い続け、トイレ以外に席を立つこともほとんどなく、面会時間の終了ぎりぎりまで側を離れない。更に食事もほとんど口にしていない様子だ。

ヨシノが食事に誘っても、「ユキがいつ目を覚ますかわからないから」と、リツは頑なに側から離れるのを拒む。

事故を知って駆け付けたユキの母親 晴恵も、リツがあまりにも思い詰めた様子なので心配しているほどだった。

リツにとって、ユキの存在は何よりも大きい。

それは、二人をずっと近くから見守ってきたシユウとヨシノには、わかり過ぎるほどに明白な事実だ。

そのユキがリツの目の前で事故に、いや、正確に言うと殺されそうになったのだ。

そんなことがあったのに、リツが平気でいられるはずがない。

ユキに危害を加えた二人組は、すでに警察に身柄を拘束されているらしい。

けれど、そんなことは何の救いにもならなかった。

「シユウ、どうしよう」

「おい、ヨシノまで泣くなよ」

泣きたい気持ちは誰もが同じだったけれど、シユウはそう言わずにはいられなかった。

ヨシノが涙を拭いながら、「だって」と言い訳する。

「リツちゃん、やっと前向きになるつもりだったんだよ?」

「前向き?」

「ちゃんと言っつて……、ユツキーに、ちゃんと告白するんだって、言っつたの……」

それを聞いて、シユウはヨシノが自分以上に落ち込む理由がやっと理解できた。

リツとユキは、二人を知る誰から見ても両想いだった。けれど、恋人同士という関係になることを、リツは怖れていた。

詳しい原因をヨシノ達は知らないけれど、かつて第三者も含めた恋愛で揉め、二人は疎遠になっていたらしい。

リツが男っぱい言葉使いや振る舞いをするのも、ユキに女であることを意識させない為なのではないかとヨシノは思っている。

そこまでして徹底的に「仲間」であることに固執し続けたリツが、ユキと揃っての里帰りから戻った直後にヨシノに一大決心を告げたのだ。

帰郷の際にリツに心境の変化を与えるような出来事があったのだ

ろう。

リツとユキに幸せになってほしいと心から願っていたヨシノは大喜びではしゃいだ。

それが今や、遠い過去の話のようにすら思える。

シュウの胸の内にも、忌々しい思いが広がっていた。

ヨシノと同じように、シュウも二人が上手くいくよう願っていたのだ。

この事件さえなければ、今頃二人はこれまで以上に仲睦まじく、そして二人で作り上げた新曲を、リツは自信満々に皆の前で披露していたはずなのに。

「くそっ」とシュウの口から誰に向けたわけでもない悪態が零れる。

頭の中に過ぎるのは、担当医師から聞いた、ユキの状況。

『最善は尽くしますが、意識が戻る可能性は、あまり高くはありません』

冷静に、けれど苦渋を滲ませて担当医はそう告げた。さらに、厳しい言葉は続く。

『もし、意識が回復したとしても、身体に障害が残る可能性もあります』

その障害の可能性は様々で、一概にどうなるとは言い切れないようだったが、最悪の場合は半身不随になる可能性まであるらしい。

どこまでも暗い未来しか想像させてくれない医師に、怒りをぶつけたくもなかった。

しかし、それは単なる八つ当たりでしかない。今現在も、病院側は努力を続けてくれているのだから。

何もできないことがこんなにも歯痒い。

ユキに対しては勿論、リツに対してさえも。

結局二人は、注文した物に手をつけることもなく、ほぼ無言で店を後にした。

テーブルには、ただ静かに熱を失っていくコーヒーだけが残され

ていた。

そんな日々が積み重なり、心の中に重苦しさだけが増していく。気付けば、ひと月ほどが過ぎていた。

相変わらず、ユキの意識は戻らない。晴恵にも疲れが色濃く影を落とし、かろうじて見せる笑顔にも力がなかった。

リツは、見るからにやつれていた。

それでも倒れずに済んだのは、ヨシノが無理矢理に食事を取らせただからだろう。側を離れようとしなければと、お弁当を作って持っていく、食べさせたのだ。

さすがにリツもそれを無下に断ることもできなかつたらしく、大人しくヨシノに従った。

今日もまた、ヨシノはお弁当を持参して、シユウと共に病院を訪れていた。面会受付を済ませ、すでに通い慣れてしまった病室への廊下を歩く。

小さくノックをした後、「失礼しまーす」と、ヨシノは控えめに声を掛けてから病室のドアを開けた。

ベッドの上には、様々な管や機械に繋がれたユキ。

その傍らには晴恵の姿しかなかった。

「こんにちは。リツちゃんはお手洗いでも行ってるんですか？」

リツがユキの側にいないことは珍しい。しかし、今までにも偶然席を外していたことがあった為、ヨシノは軽い気持ちでそう問いかけた。

ところが、晴恵は不安げな表情で首を横に振る。

「今日、六花ちゃん来てないのよ。だから貴方達と一緒に来るのかと思っていただけ……」

「え？ 来て、ないんですか？」

有り得ない。

即座にヨシノとシュウの頭にはその言葉が浮かんだ。

どれだけ体調が悪くても、リツはユキに会いに来ていた。あまりにも具合が悪そうなので、そのまま病院で診察を受けさせたことだつてあるほどだ。

家に強制送還したことはあつても、リツの意思でここに来なかったことは一日だつてない。だとすると、それはリツが来られないだけの理由があると思えなかった。

「ちょっと電話掛けてきます」

いてもたつてもいられなくなり、ヨシノは携帯だけを持って病室から離れた。

走ることはできないので、出来る限り早足で院内を抜け、中庭の隅でリツの携帯電話の番号へと掛ける。

しかし、数秒のラグの後、コール音の代わりに聞こえてきたのは無機質な音声ガイダンス。それはヨシノを愕然とさせるには十分過ぎるほどのものだった。

「な、んで……？」

それ以上の言葉が出てこない。

何故なら、そのガイダンスがリツの携帯番号が現在は使用されていない旨を告げていたからだ。

もちろん、番号を変更した連絡なども受けてはいない。

すぐに思い立って、今度は別の番号へと電話を掛けた。リツの一人暮らしの部屋につけられているはずの固定電話だ。

しかし、こちらと同じく番号未使用のガイダンスへと切り替わってしまった。

泣きたくなるのを堪えて、ヨシノはユキの病室へと戻る。シュウならきつと、この状況を打破してくれるのではないかと、か細い期待を込めて。

「ヨシノ？ どうしたんだ？」

戻ってきたヨシノに、シュウは明らかに不審そうな眼差しを向けた。

それは当然だろう。電話を掛けると出ていった時以上に、ヨシノの表情は悲壮感を増していたのだ。

「リツちゃんの携帯、解約されてるの」

「解約？ 家は？」

「そつちも。ねえ、シユウ、リツちゃんまさか……」

誰もが最悪の事態を想像してしまう。

晴恵の身体がぐらりと傾き、側にいたシユウは慌ててその瘦躯を支えた。

「大丈夫ですか？」

「六花ちゃん……まさか、私があんなことを言ったから……」

シユウに支えられながら、晴恵が自らを責めるように顔を覆ってしまう。

リツに何を言ったのかを問い質すと、涙混じりに晴恵は答えた。

「雪央が目覚ます可能性は本当に低いと、この間改めてお医者様に言われたの。だから、六花ちゃんはもうこの子のことを忘れた方が幸せなんじゃないかって」

「そんな……」

「私だつて、そんなことは思いたくないわ。でも、六花ちゃんは昔から元気で明るくつて。この間一緒に帰ってきた時だつて、二人とも本当に仲が良かったから、このままずっと一緒にやっていってくれればと思っていたのに……」

何度も涙で声を詰まらせ、取り出したハンカチで何度も目元を拭いながら晴恵は続ける。

「今の六花ちゃんは見えていられなくて。雪央も、六花ちゃんには幸せに笑っていてほしいんじゃないかと考えたら……」

幼い頃からの二人を知っている晴恵にとっては、ユキが目覚めないことだけでなく、リツが思い詰めてしまっている姿が苦しくて仕方なかったのだろう。

母親だからこそ、ユキなら今の状況をどう考えるのかが想像できた。だからこそ、言いたくもない言葉をリツに向けたのだが、それ

がこんな風な音信不通状態に陥るとは思いもしなかった。

「おばさん、私、今からリツちゃんのマンションに行つてきます」

「渡瀬さん」

「だからおばさんも、そんな風に考えるの辞めませんか？ ユッキーは、絶対目を覚ますつて信じましようよ。ね？」

ヨシノにそう言われて、晴恵は更に涙を溢れさせ、顔を覆いながらも何度も頷いた。

前向きな発言をしたのは、ヨシノ自身の不安の表れでもあったのだが、それでも晴恵が考えを改めてくれたことには少し救われる思ひだった。

「ヨシノ、行くか」

「うん。あ、おばさん、これみんなで食べようと思って作ってきたんです。少しだけいいんで食べて下さい。おばさんもちゃんと食べないと、倒れちゃいますよ」

今日は大人数で食べると思って、いつもよりずっと多く作ってきたお弁当を晴恵へと手渡す。明らかに晴恵一人では食べきれない量ではあったが、晴恵は素直にそれを受け取った。何より、ヨシノの心遣いが、晴恵には有り難かった。

「ありがとう、渡瀬さん。六花ちゃん見つかったら、教えてちょうだいね。私、ちゃんと謝りたいわ」

「はい。すぐ連絡します。シュウ、行こう」

「おう。じゃあ、失礼します」

二人揃って晴恵に頭を下げ、病院を後にする。目指す先は、リツが一人暮らしをしているワンルームマンションだ。

悠長にしている気分ではなく、タクシーを拾い直接目的地へと向かう。

築年数の割に綺麗なのだとリツが自慢していたマンションの前でタクシーを下りると、真っ直ぐにリツの部屋の前へ。

鍵は、当然かかっていた。

インターホンを押して少し待ってみたものの、何の返事も無い。

出掛けているのか？ それとも、中にはいるのだが無視をしている可能性もあるし、もっと最悪の可能性すらあった。

しばらく考えた挙句、二人は一階に住んでいる管理人の元を訪ねることにしてみた。

もしリツが中にいて、更に彼女の身に何かあったのだとしたら、どちらにしても管理人の協力が必要になる。そう判断しての訪問だった。

しかし、そこでもまた二人は新たな衝撃を受けることとなった。

「305の戸枝さんなら引越したよ」

初老ののんびりとした雰囲気を纏った管理人は、これまたのんびりとそう告げた。

しかし、それを聞いた方はのんびりなんてしてられない。

「引越したって……いつですか!？」

「昨日の夕方ですなあ。急だもんでこっちもビックリしたんだが、『来月分の家賃も払いますから』言うて、解約書と一緒にお金も置いていきなさって……」

それ以上、聞く必要はなかった。二人は管理人に礼を言っ、マンションを後にする。

完全に、リツを捕まえる為の手がかりがなくなってしまった。

「シュウ、どうしよう……」

「……ごめん。俺もどうしていいかわかんねえ」

途方に暮れた二人には、もう新たな道を探す力は残されていないかった。

こうして、リツはメンバーの前から、そしてユキの側から姿を消したのだった。

#14 Tolerant Revenge

久しぶりにすっかりと目覚めの良かった理恵子は、隣で眠っている貴久を起こさないようにそっとベッドから抜け出した。

貴久は昨夜も仕事で、明け方近くに帰ってきたのだろう。理恵子の行動にも全く気付かない様子で、身動きすらしなかった。

着替えを済ませ、キッチンへと向かい、コーヒーマーカーに豆をセットする。コーヒーが出来のを待つ間に、理恵子はリビングの本棚の片隅に差し込まれていた、クリアファイルを取り出した。

その中には大学時代のサークル名簿が入っている。

個人情報に掲載されているということもあり、また時々元サークル員からの連絡があったりするものだから、捨てるに捨てられなかったのだ。しかし、それが今となっては幸いしたと思っっている。

学年毎に並べられた名前の中から、二つの名前に蛍光ペンでラインを引いた。

一人は齋藤修。サイトウオサム もう一人は渡瀬佳野。ワタセヨシノ

どちらも理恵子と一時組んでいて、後にゆきと一緒にバンドを結成したメンバーだ。

律野に直接連絡をとる方法も考えたのだが、ゆきの態度からそれは拙いような気がした。それよりも周りのメンバーから情報を集めてからの方が良いのではないかと思っただのだ。

コーヒーの香ばしい香りが鼻腔をくすぐる。カップに移し、ミルクだけはたっぷり注いで口に含んだ。その温かさが、空腹の胃に染みる。

時計に目を遣ると、まだ七時を過ぎた頃。いくら後輩とはいえ、特別に親しいわけでもないので、電話を掛けるには少々早過ぎるように思えた。

しかし、テレビをつけたら、貴久を起こしてしまう可能性がある。他に何か時間を潰す方法はないかと考え、届けられているはずの新

聞をまだ郵便受けから取り出していないことに気付いた。何とかそれで時間を潰せそうだと判断し、玄関まで足を運ぶ。

コンパクトに畳まれて差し込まれている新聞を抜き取り、ダイニングテーブルに戻ってそれを広げる。

しばらく細かい活字を目で追っていると、カチャリとドアの開く音が耳に入った。

「あら、思ったより早く起きたのね」

寝間着姿のままの貴久が、ダイニングに顔を出したのだった。しばらくは起きないと思われたが、そうでもなかったらしい。

貴久はそのまま理恵子の正面の席に腰を下ろす。

「理恵子こそ、今日はいつもより早いんじゃないか？」

「久しぶりに気持ち良く目が覚めたから。二度寝しちゃうともったいないでしょ？」

笑顔でそう返し、新聞を畳んでテーブルの脇に置く。それから貴久の分のコーヒーを淹れる為に理恵子はキッチンへと向かった。

残っていた分のコーヒーでカフェオレを作り、貴久へと手渡す。

再びテーブルへと腰を落ち着けると、理恵子は新聞を読み始めている貴久に訊ねた。

「ねえ、貴久」

「うん？」

「あの子と一緒にいるのは、^{ユキオ}幸緒ちゃんと似てるから？」

「理恵子……」

単刀直入な問いに、貴久は返す言葉を失う。理恵子自分が自分とゆきの関係に気付いているのは槇野の話からわかってはいたのだが、まさかそこまで見透かされているとは思わなかったからだ。

「あのねー。これでも私は貴方の奥さんよ？ それくらいわかるわよ」

「……おみそれしました」

見くびっていたという思いと同時に、その理解の深さから改めて理恵子の愛情のほどを感じる。少し茶化した風に答えはしたものの、

貴久の言葉に偽りはなかった。

「でもね、あの子、幸緒ちゃんとは違うわよ」

「わかってるよ。けど……、ほっとけなくてね。こんなことしたって、ユキへの償いにはならないとはわかってはいるんだが……」

「償いも何も、貴久は何も悪いことしてないじゃない」

「何もしてないのが駄目だったんだよ。俺は、もつとユキの側にいてやるべきだったんだ。俺がちゃんとアイツの寂しさに気付いてやれば……」

貴久の妹・幸緒は、三年前に病気で亡くなった。

もともと病気がちで入退院を繰り返していたのだが、ある日を境に治療を拒むようになり、そのまま亡くなってしまったのだ。

貴久は当時仕事で忙しく、病弱な妹にあまり構ってやれなかった。幸緒には恋人がいて、毎日見舞ってくれていたため、安心しきっていたということもある。

しかし、貴久の知らぬうちにその恋人は幸緒の元を去り、あるうことか幸緒の友人の一人と恋人同士になっていた。それを知った時には、もう手遅れなほどに病状は悪化していた。

貴久は、今でも幸緒がこの世を去る数日前に言った言葉が忘れられずにいた。

病院の白いベッドに横たわり、青白い顔で幸緒は微笑みながらこう言ったのだ。

『お兄ちゃん、私、名前の通りにはいかなかったね。それとも、あの人の幸せを結んで上げられたから、間違っではないのかな？』

幸緒。

娘が幸せと上手く結び付けられますように、という両親の願いが込められた名前だった。

けれど、その時の幸緒にはその名前が皮肉に感じられたのだろう。自分と結ばれるはずだった恋人は、自分が縁で知り合った友人へと気持ちに向けてしまったのだから。

それでも、幸緒は恨み言一つ零さず、ただ静かだった。静かに、

諦めきっていた。

そんな幸緒に、貴久は何も言うことができなかつたのだ。妹を失ってから、後悔ばかりが浮かんでくる。

もう少し側にいてやれれば、恋人に裏切られた傷を癒してやれたかもしれない。友人に裏切られた傷を癒してやれたかもしれない。それができなくても、無理やりにも治療を受けさせることが出来たかもしれないのに、と。

ゆきに初めて出会った時、彼女の笑顔に幸緒の微笑みが重なった。だから放っておけなくて、奇妙な、説明のしがたい関係を始めてしまったのだった。

「あのね、あの子、バンドでボーカルやってたのよ」

徐に、理恵子がゆきの話を始める。前後の脈絡のなさに、貴久は戸惑いながらも頷いた。

「槇野から聞いた。理恵子からヴォーカルのポジションを奪い取ったんだらう？」

「そう。それがね、あの子の本当の姿だと思うわ」

「そうなのかな。俺には未だに想像できないんだが……」

貴久には幸緒と同じく儂げで壊れそうな、そんなゆきの印象しかない。

激しさや情熱的といったものとは、全く無縁にしか思えなかつた。しかし首を捻る貴久に、理恵子はふふと自信に満ちた笑みを浮かべる。その表情は、どこか勝ち誇っているようにも思えた。

「あの子はね、私よりもっとずっと音楽と、それも律野君の音楽と離れられないはずよ。貴方は聴いたことないからわからないでしょうけど、あの子たちの音は、互いに必要不可欠なんだもの」

「随分、ゆきのことを買ってるんだな」

「当然よ。私を引退に追いやった子よ？ あんなの目の前で見せつけられたのに、歌うのは辞めましたとか言わせないんだから」

ゆきが歌うのは義務だとしても言わんばかりの理恵子の言い草に、貴久は思わず苦笑を洩らしてしまった。

我が妻ながら、理恵子は遅しい。いや、遅しくなったのかも知れない。これから生まれてくる小さな命の為に、少々のこと動じているわけにはいかないだろう。

「だからね、私はあの子を元の場所に返してあげたいの」

「その方法が、それ？」

理恵子の大学時代のサークル名簿。新聞を手に取った際に、その下に置かれていた為、その存在に気付いた。目線で示されたそれに、理恵子はゆっくりと頷く。

「多分、律野君とあの子の間で、何かがあっただと思う。そうだなきゃ、あの子が歌っていない理由がわからないから。だから、他のメンバーに訊いてみようと思うの。どっかの傍若無人なバー店員にも頼まれたしね」

「槇野も意外に可愛いヤツだよな」

「可愛いー？ 貴久、それは大いなる勘違いよ！ あの馬鹿が可愛いだなんて、絶対に有り得ないんだから！」

槇野の話になった途端に、それまで優しさに満ちた笑みを浮かべていた理恵子の表情が一変する。どうやら、今回の件を機会に仲良くなるわけではないらしい。

そこは変わらないかと、溜め息まじりに苦笑を零しつつ、とりあえず理恵子を宥めた。

「俺からも頼むよ。何とかしたかったけど、俺だけの力じゃどうにもならないような気もしてたしね」

「ただ、ね。もしかしたら、二人の関係は修復のしようがない可能性もあるわ。そうだった時は、……もうちょっとあの子の側にいてあげてもいいわよ」

「理恵子」

「もちろん、そうでないことを祈ってるけどね」

寛容すぎるとも思える理恵子の言葉に、貴久は感謝の言葉しか思い浮かばなかった。

そして、その言葉でも足りないほどに。

立ち上がり、座っている理恵子を背中からそつと抱き締める。

「俺には出来過ぎた奥さんだな」

耳元にそう囁くと、当たり前前よ、と少し照れた声と微笑みが返った。

15 Tail of Hope

駅前にある小さな喫茶店。

その窓際の一席で、シユウはぼんやりと道を行き交う人々の群れを眺めていた。

しかし、その中には目当てとなる人はいない。否、すでに見つか
るはずがないと、半分諦めが入った視線で見ている。

入口のドアベルが鳴り、一人の男性客が入ってくる。シユウはその存在に気づいてはいなかったが、男はシユウの姿を見つけると足
早に近寄ってきた。

「シユウ君、ごめん！ 待たせたね！」

焦ったようにかけられた声で、シユウはようやくその存在 か
つてのマネージャーである須藤 に気付いた。

「いや、須藤さんこそ忙しいのに、スイマセン」

「気にしない気にしない。俺の方が会いたかったんだし」

そういうと、須藤はシユウと向かい合わせに腰掛け、空いている
隣の席に荷物を置いた。

ウェイターが水を入れたグラスを持ってくると、そのままアイス
コーヒーを注文する。

「それで、新しい情報は？」

「いえ、相変わらず何も……」

シユウが無念さを露わに返すと、須藤もあからさまに気を落と
した様子で相槌を打った。

「すみません、須藤さんが色々良くしてくれてるのに……」

「だから、それも気にしないの！ 俺が好きでやってるんだから！」

須藤はそう言って笑うのだが、シユウにはそれを簡単に受け入れ
てしまうことはできなかった。

須藤は今、他の新人アーティストのマネージャーをしている。

ユキの事故以来、『Weier Schnee』は事実上解雇

と喋っていい状況となったのだから当然だろう。

しかし、それでも須藤が事務所社長に直訴し、籍だけ置いてもらっている状態なのだ。ユキが目覚め、リツが戻り、また活動が再開できるようにと。

それだけ自分たちの音楽を大切にしてくれていることが嬉しい。けれど、同時に心苦しさも感じてしまう。

ユキはまだ目覚めない。リツの行方は依然として知れない。須藤の頑張りにも、限界があるはずなのだ。

忙しい合間を縫って、須藤は積極的にシユウと連絡を取り、自らも知人に協力してもらいながらリツの行方を追ってくれていた。

ヨシノも、リツの実家に連絡を入れたり、大学の友人たちに訊いて回っている。心当たりをしらみつぶしに当たっているようだった。それでも、見つからない。

リツが姿を消してから、もうすぐ一年が経とうとしている今、それぞれの心の内は、諦めの念が次第に色濃くなり始めていた。

「さすがに、そろそろ探す当てがなくなってきたって、ヨシノも言っていました」

「シユウ君……」

今まで悲観的な言葉は避けてきたが、ここまで見つからないとどうしても零さずにはいられなかった。シユウの項垂れる姿に、須藤の表情も曇ってしまう。掛けるべき言葉も思い浮かばなかった。

が、ふと須藤は微かな振動音に気付く。携帯電話のバイブレーション機能だ。自分の物ではないとわかり、シユウに声を掛ける。

「シユウ君、携帯鳴ってない？」

「え？ あ、ホントだ」

バッグの中に入れていた為に気付かなかったらしく、シユウは慌てて携帯電話を取り出した。その液晶画面に表示された名前を確認した途端、驚きを露わにする。

「出ないの？」

「あ、いや、出ます。ちょっとすいません」

須藤に軽く断ってから通話ボタンを押す。電話口から聞こえてきた声は、もう何年も聞いていなかった懐かしい澄んだ声音だ。

『斎藤君?』

「お久しぶりです、理恵子先輩。いきなりどうしたんですか? びっくりしましたよ」

理恵子がかつて、リツがメンバーに入るまでは一緒にバンドを組んでいた先輩。しかし、リツがメンバー入りしてからは少しずつ疎遠になっていた。もともと電話やメールなどもあまりしなかったの
で、どうして今頃、何の前触れもなく連絡が来るのか不思議でたまらない。

『あのね、ちょっと訊きたいことがあったの』

「訊きたいこと? 何ですか?」

『……律野君って、今何してるの?』

その問いに、思わずなるほど言いそうになってしまった。シユウには、理恵子がユキにかなりご執心だったようなイメージがある。もしかしたら、今でもユキに対して何らかの想いがあるのかもしれない
なかった。

けれど、それにしてもどうして今になってという思いは薄れない。
『言いくいなら質問を変えるわ。どうしてメジャーデビューまでしたのに、今のあの子は歌ってないの?』

理恵子が痺れを切らしたように問う内容に、シユウは奇妙な違和感を覚えた。理恵子はどうもユキに対して何か思っているようではない。
むしろ、気にしているのはあの子、つまりはリツの事のように思えたのだ。

そして何より『今のリツ』が歌っていない状況を知っている。

それから導き出される答えは、一つしかなかった。

「ちよつと待って下さい。もしかして、理恵子先輩はリツの居場所を知ってるんですか?」

「え?」

大人しくシユウの電話を見守っていた須藤も、思わず声を上げ、

腰を浮かす。

思いもしないところから、手掛かりが得られるかもしれないことに、思わずシュウの携帯電話を握る手に力が籠った。

『居場所って……、何よ、それ。あの子、行方不明にでもなってるわけ？』

「詳しいことは後で話します！ それよりも、リツがいる場所知ってるんですか!？」

藁にも縋る思いとは、こういうものを言うのだろうと思う。

シュウはただただ、理恵子が『否』と言わないことを願わずにはいられなかった。

鼓動が早くなる。これで駄目ならもう立ち直れないほどに、今の自分が理恵子の言葉に期待しているのがわかった。

『…… Anastasia』

「アナス、タシア？」

その単語に聞き覚えがなく、シュウはどこか間の抜けた声で繰り返した。

『あの子が働いてるバーの名前よ』

「ありがとうございます！」

『お礼はいいから、あの子と律野君に何があったのか聞かせて。そうね、出来れば今からでも会える？』

情報提供してくれた理恵子の要望を無下に断ることなどできなかつた。そして、それ以上に、理恵子がただ単に興味本位で連絡し、ことの経緯を知りたがっているように思えなかつた。わかりましたと短く答え、今いる場所を伝え、理恵子自身が出向いてくれるということの話が纏まった。

電話を切ると、一部始終を見守っていた須藤が身を乗り出して状況を確認し始める。

「リツちゃん、見つかったの!？」 今の人、何で知ってたの!？」

「須藤さん、落ち着いて……」

呆れたようにシュウに宥められ、須藤は慌てて周りを見回した。

幸いにも店内に客は少なかったが、やはり目立っていたようで幾つか怪訝そうな、もしくは迷惑そうな視線を向けられている。

須藤が苦笑いで他の客たちに誤魔化し、座り直すのを見て、シユウは改めて口を開く。

「理恵子先輩が何で知ってるのかは聞いてないけど、どうやらリツの居場所については間違いなさそうだった。今から来てくれるって言ってる。須藤さん、仕事抜けてきてるんだろ？ 後で連絡するか」

指摘を受けて腕時計を確認すると、確かに次の予定までにギリギリの時間だった。須藤は名残り惜しいと思いつつも、席を立つしかないと観念する。

「じゃあ、絶対連絡してよ！ それから、ヨシノちゃんにも、連絡してあげなきゃ駄目だからね！」

「わかってますって。ほら、早く行かないと間に合いませんよ？ ここは俺がおりますから、行っちゃって下さい」

ただでさえ迷惑を掛けていると感じているのに、これ以上彼の立場を悪くするわけにはいかないと思いつつも、シユウはわざと煩げに須藤を追い払った。渋谷店を出た須藤は、それでも念を押すかのように振り返って手を振る。

窓越しにそれに応えた後、シユウは誰よりもリツの行方を案じている人物へと電話を掛け、来るべき時に備えたのだった。

16 Anastasia

気がつけば、貴久と初めて出逢ってからもう一年半ほどが過ぎている。

そう思ったゆきの口からは、自ずと溜め息が零れていた。

数日前、貴久の妻である理恵子が、『Anastasia』に訪れた。滅多にないことに、普段と変わらぬ様子を装ったものの、内心では驚いていた。

理恵子は、自分たちの関係に気付いている。

何となくではあったけれど、そう確信した。

「そろそろ、潮時かな」

槇野に知られ、早川にも知られ、そして理恵子にまでも知られてしまった。

理恵子の性格を詳しくは知らないけれど、多くの場合、妻は夫の浮気など許さない。そうなってしまうのは、貴久に申し訳ないことになってしまふ。いくら、声をかけてきたのが貴久の方であっても、つまり、ゆきの選ぶべき道は、すでに一つしか残されていないのだった。

ちょうどタイミングのいいことに、今日は貴久からドライブの誘いがあった。

約束の時間まではあと三十分ほど。身支度はとうに出来ている。あとは、ただ、自分の気持ちの整理をつけるだけだった。

約束通りの時間に貴久が到着し、二人を乗せた車はたいしたあてもなく走り出していた。いつも、そうだった。

最初から目的を持って出掛けるのではなく、いつもその時の気紛れ 主にゆきの であちらこちらに車を走らせる。貴久の好き

なジャズをBGMに、他愛もない話をしながらドライブするのが常だったのだ。

「ゆき、どこ行きたい？」

そう貴久が問い掛けるのも、耳慣れたものだった。

ゆきは窓の外を見つめたまま、どこがいいだろうと考える。

別れに、一番相応しい場所はどこなのかを。

けれど、そんな場所はすぐには思いつかなかった。

「思いつかないなら、俺の行きたいところ行つていい？」

黙ったままのゆきに、貴久が提案をした。

珍しいと思つたけれど、特に反対する理由もなかったので、素直に頷く。

それに、最後のだから貴久の望む場所で別れるのもいいのかもしれないと思えた。

車は静かに走り続け、街中を抜け、やがて山道へとさしかかった。車内の会話はほとんどなく、ゆきはただ、流れる音楽に身を委ねていた。

が、曲が切り替わり、新たにギターの音色聞こえてきた瞬間、

「止めて！」

突然の叫びに、貴久は車を路肩に停めた。助手席のゆきを見ると、真っ青な顔で両耳を覆っている。

「ゆき」

「音、止めて！ 何で、何で貴久さんがこの曲……！」

「槇野にもらった」

「嘘！ そんなはずない！ だってこの曲は……！」

「ゆきたちの、曲だから？」

ゆきよりも先に、貴久がその答えを口にした。

そう、カーステレオから流れてきたのは、ゆきがかつて『リッ』と呼ばれていた頃、『ユキ』に一番に歌って聴かせると母校のグラウンドで約束した曲。

そして、約束も果たせぬまま、置き去りにされた曲だった。

「綺麗な曲だな」

貴久は、ポツリとそれだけ呟くと、再び車を発進させる。

何も言うべき言葉が見つからず、ゆきは混乱したままただ耳を塞ぎ、助手席で蹲っていた。

ほどなく車は駐車場に入り、停車する。

貴久はエンジンを切ると、「着いたぞ」と短くゆきに声を掛けた。ゆきはエンジンとともに曲が止まったことに安堵するが、貴久がどうしてあの曲をゆきに聴かせようとしたのかがわからない。

それだけでなく、どうやってあの曲を手に入れたのか。

槇野にもらったと答えたけれど、そんなはずはない。

あの曲を持つているのは、自分が一緒にバンドを組んでいたメンバーだけ。他にはまだ聴かせてすらなかったはずなのだから。

貴久は相変わらず詳しい説明もないまま、車を降りた。

ゆきはしばし悩んだものの、このまま車に残っていても仕方がないので、貴久の後に続く。

そこは、霊園だった。

見晴らしは良く、昼間は眼下の街並みが、夜ならば見事な星空が臨めそうではあったけれど、男女の逢瀬には少々そぐわない。

貴久が何のためにここに連れてきたのか、それもわからなかった。前を歩く貴久は、迷うことのない足取りで、まっすぐにコンクリートで舗装された通路を進んでいく。

立ち並ぶ墓石の隙間を縫って歩くこと数分。

一つの墓の前で、貴久は足を止めた。

墓石はまだ新しい部類に入るだろう。正面には、『澤田家之墓』と彫られていた。

「貴久さん？」

無言で墓石を見つめる貴久に、ゆきはようやく声を発することができた。

けれど、やはり、何と問えばいいのかわからない。

ただ、刻まれている文字から、この墓が貴久の血縁のものだとい

うことだけはわかった。

「…………『ゆき』の、墓なんだ」

「え？」

一瞬、何を言われているのかと戸惑った。

貴久が『ゆき』と呼ぶ人物を、ゆきは自分以外に知らない。だが、今貴久が指している人物は、自分ではなかった。

「妹。名前は『幸せ』にへその緒の『緒』って書いて『ゆきお』。俺はずっと『ゆき』って呼んでた」

こんな風に貴久が自分自身のことを話し出すのは、初めてのことだった。

今までは、互いのことをあまり話題にしたことはない。

ゆきは自分のことを話したくなかった。だから、同時に貴久のことをあまり詳しく訊くのは申し訳ないと感じていたからだ。

貴久もそれを感じ取っていたのか、自らのことは話そうとしなかったし、ゆきのことをしつこく訊こうともしなかった。

そして、ゆきにとってはその空間がとても居心地が良かったのだ。なのに、突然ここにきて貴久が話し始めたことに驚きを隠せなかった。

それと同時に、貴久はどんな気持ちで『ゆき』と呼んでいたのだろうか、重苦しい気持ちに苛まれる。

「初めてゆきに…………って言うことややこしいな。君に初めて会ったとき、『ゆき』に似てるって思った。消えてしまえばもう霧困気も、諦めきつたような笑顔も、全部が全部、俺が最期に会った『ゆき』とかぶって、ほっとけなかった。要は、『ゆき』を死なせてしまった後ろめたさから、解放されたかっただけなんだけどな」

自嘲の笑みを浮かべる貴久に、ゆきは何も言えなかった。

貴久が自分に誰かを重ねていることは薄々気付いてはいたのだが、それほど深く考えてはいなかったのだ。

それに、ゆき自身にとっても、貴久はある意味身代わりだった。

貴久の声は、『ユキ』とよく似ている。初めて聴いた時、あまり

のそっくりさに、思わず『ユキ』と呼び掛けてしまったほどだ。

まったく目覚める兆しのない『ユキ』と同じ声が聴けることに大きく心が揺らいだ。

また会いたいと言われても、断ることができなかった。

そして、周囲に黙って引越しをし、もう『ユキ』と会わないと決めた後も、貴久と会うことはやめられなかった。

『ユキ』を忘れない。

『ユキ』と過ごした『リツ』を消してしまいたい。

そう思い、会わないことを決めたはずなのに。

『ユキ』の声を聴いていたい。

『ユキ』の存在を消してしまいたくない。

そんな矛盾した想いが、心の中でせめぎ合う。

成り行きで『ゆき』と名乗ったことになってしまったことは、ゆきの中の矛盾を上手く消化してくれていた。

そんな時、アルバイトの面接先で思いがけずに貴久に出くわしてしまった。

ゆきにとって好都合な条件が多く揃っていたから選んだだけで、まさか貴久の店だとは露ほども思わなかった。

貴久のプライベートをほとんど訊いていなかったことが災いしたらしい。

貴久も驚いてはいたが、穏やかな笑顔でごく普通に面接をしてくれた。

けれど、ゆきの履歴書を確認した瞬間、更なる驚きを伴って、貴久はゆきを穴が開くほど見つめた。

『名前……』

『ごめんなさい』

言い訳することも出来ず、ゆきはただ謝罪を口にしながら、頭を下げた。

騙すつもりで名乗ったわけではなく、思わず『ユキ』と呼び掛けてしまったのを貴久が誤解したただけなのだが、それを訂正しなかつ

たのはゆき自身だ。結果的に、騙したことに代わりはない。

貴久は、怒るでもなく責めるでもなく、ただ静かに頷いた。

『戸枝ゆき、でいい?』

『え?』

『もう一人のバイトに紹介するの。今更違う名前じゃ呼びにくいしね。それに、「六花」って雪のことだから、あながち間違いでもないだろう?』

思いやるように提案する貴久に、涙が零れそうになった。

いつか雪のグラウンドで聞いた話。それと同じものが、同じ声で繰り返された。

『ユキ』が、すぐ傍にいる気がした。

「俺は『ユキ』君にはなれないよ」

過去に想いを馳せるゆきを現実に戻すように、貴久が呟いた。その声は穏やかだったが、厳しさも併せ持っていた。

「貴久さん……、知って、るの?」

貴久はゆつくりと頷いた。面接の時と同じように、ただ静かに、慈愛に満ちた表情で。

「全部聞いたよ。斎藤君と渡瀬さんから」

「何で……理恵子さん?」

貴久とシユウ達との繋がりを疑問に思うも、すぐに気付いた。

理恵子はシユウやユキと同じ大学だし、連絡先を知っていたとしても不思議ではない。

けれど、だからといって今更理恵子が彼らと連絡を取ろうとすることが奇妙に思えた。自分が加入する前、一時組んでいたとはいえ、それほどシユウ達と親しげにしているようには見えなかったからだ。

その疑問が表情に出ていたのか、貴久は説明に口を開く。

「理恵子はね、君に歌を辞めて欲しくないらしいよ」

「でも、私は……!」

「『ユキ』君がいないと、歌えない？」

率直過ぎる貴久の言葉に、ゆきは唇を噛んだ。
その通りなのだ。

自分は、ユキがいないと歌えない。

ユキの作った歌があつて、ユキが隣でギターを弾いてくれて初めて、自分の歌には魂が籠もる。再会した時にそれを思い知らされたのだから。

「……『六花』」

貴久が、初めてゆきの 否、リツの本当の名を呼んだ。

その力強さに、貴久も今日、リツと同じ決意をして会いに来たのだと理解する。

「俺はね、ゆきが一人で苦しんでいる時に、傍にいてやれなかった。本当の死に際も、看取ってやれなかった。今はそれを、すごく後悔してる」

「ユキが死ぬみたいと言わないで！」

思わず叫んでから、リツは我に返った。

ユキを見捨て、忘れようとしたくせに、ユキが死を迎えるかもしれないことを拒絶している。何て勝手なのだろう。辛いことからは全て逃げていくくせに。

「そうだな。ユキ君は眠ってるだけだしな」

相変わらず気分を害した様子もなく、貴久は淡々と続ける。

しかし、それがかえってリツの心の重石を増加させた。

ただ眠っているだけ。けれど、このまま一生目覚めないかもしれない。

ほんの半年ほどでもその状況に耐えられなかったのに、一生なんて無理に決まっている。

だからこそ、ユキの母親もリツに『雪央のことは忘れた方が』などと言い出したのだ。

「なあ、六花。こんな話があるんだ。ポーランドの人でね、植物状態だった人が十九年後に目覚めたことがあるらしいよ」

「そんな奇跡みたいな話、いつでも起こるわけじゃ」

「他にもね、ある病院の調査結果で、充分なケアをすれば、六割の人が植物状態から回復したっていうのもあるらしい。三年以上経つてから、話せるようになった人っていうのも何人もいたらしいよ」

貴久が並べる事柄一つ一つが、リツの胸を抉る。

それが本当であれば、嬉しいし、希望だつて持てる。

けれど、確率は100%ではない。ユキが成功例の側に必ず属せるのだとは、誰も言い切れないのだ。

「ユキ君はまだ一年半ほどだろ？ 諦めるには早いんじゃないか？」

「でも、このままずっと目覚めないかもしれない」

「確かにそうだけど、傍にいなくて六花は後悔しないのか？」

「こう、かい……？」

貴久のいう後悔が何に對してのものかわからずにいると、「酷なことを言うけど」と前置きをしてから貴久は語り出した。

「確かに目覚めないかもしれない。けれど、ただ目覚めないだけじゃなく、容体が悪化して亡くなってしまふ可能性だつてあるだろう。さつき六花は『ユキが死ぬみたいに言わないで』つて言ったけど、その可能性はゼロじゃない。もし、そうなつた時、六花は傍にいなくて後悔しないのか？」

改めて残酷な事実がつきつけられ、リツは言葉を失つた。

心のどこかで、ユキは眠っているだけ、目を覚まさないだけで生きていくという事実に甘んじているところがあった。

けれど、貴久の言うとおり、その状態はいつ生と死のどちらに転んでもおかしくないほど、不安定なものでもあつたのだ。

「俺は六花に、俺と同じような思いはしてほしくない」

「貴久さん……」

「ま、キツイこと言ったけど、そんなことにはならないと思つてるんだけどね」

少し強張っていた表情を和らげ、貴久はそつとリツの頭を撫でた。今まで、一度として触れようとしなかつた貴久が、初めてリツに

自らの意思で触れた。

その手の平は少しづつづつとしていて、リツの知っているユキの手とは、まったく正反対だった。

「ユキ君のところに、帰りなさい。きつと、ユキ君は君のことを待ってるよ」

「でも」

「君の友達も、ユキ君のお母さんもまだ諦めてないんだよ。なのに、ユキ君が一番必要としてる人が、真っ先に投げ出していいのか？」

ユキの、一番必要としている人。

そう言われることが、嬉しかったはずなのに、辛い。

ユキを見捨てた自分を、ユキはまだ必要としてくれるのだろうか？
そんな想いが、リツの足を竦ませる。

「ちゃんと気持ちを伝えたら、びっくりしてユキ君も目を覚ますかもな」

冗談めかして笑う貴久が、もう一度頭を撫でた。

まるで、幼い妹をあやすような仕草だった。

堪えていた涙が、想いととも溢れ出す。

「大丈夫。俺の勘は結構当たるんだから。それにあの歌、六花の声で聴いてみたいな」

ユキに似た声に後押しされるように、リツはゆっくりと頷いた。

「ここでいいか？」

一年前まで、毎日のようにリツが通っていた病院。その手前の交差点脇で、貴久は車を止めた。

どうやら駐車場は満車のようで、空き待ちの長い列ができていて。貴久自身が病院に用があるわけではないので、中に入れなくても問題は無い。ここまで送ってもらえただけでも十分だった。

リツは頷くと、助手席から降り、貴久に向き直る。

「貴久さん、ありがとう。それから、理恵子さんにも」

「あと、槇野にもな。アイツが色々画策してたところあるから」

「まっつきーが？」

「可愛い奴だろ」

この場にはいない相手をからかうような笑みを浮かべる貴久に、リツの頬を自然に緩んでいた。

随分と遠回りをしたけれど、自分はまた元の場所に戻ることを決めた。

それはきつと、出逢えた人達の優しさのお陰だと言い切ることができるだろう。

「じゃあ」

けれど、いつまでもその優しさに甘えて、逃げ続けるわけにはいかない。

リツは、ゆっくりと大切な人の待つ場所に向かって歩き出した。

遠ざかる背中を見つめながら、貴久は達成感の中に僅かばかりの寂寥感に感じていた。

六花と過ごす時間は、居心地が良かった。

自分が幸緒に与えてやれなかった時間を、六花といることで埋め合わせできるような気がしていた。

存在が支えとなっていたのは、六花だけではなかったのだ。

そして、日に日に六花の諦めに満ちた瞳をどうにかしてやりたいという思いが膨れ上がった。六花が立ち直ることが、幸緒への償いのように思えた。

もっともそれは、ただの自己満足で、自分が罪の意識から救われなかったただけなのだとはわかる。

けれど、たとえ偽善でも、六花が元の居場所に戻ったことは、素直に良かったのだと思えた。

けっして楽な道ではないだろう。たとえユキが目を覚ましたとしても、かつてと同じように身体を動かすことが簡単ではないことも

容易に想像がつく。

それでも、あの二人は一緒にいた方がいいのだ。そう言い切った自分の妻の言葉を信じたかった。

後ろ髪を引かれるような想いを断ち切るかの如く、携帯が鳴った。着信は理恵子からだった。

「もしもし」

『どう？』

「今、病院まで送っていったところだよ」

『そう。お疲れ様。今日はお店休みにして、家でゆっくりしたら？』

「いや、別に休むほど疲れてはないよ」

『でも、へこんでるでしょ？』

いつもと変わらぬ調子で話していたはずなのに、ずばりと凶星を指され、貴久は言葉に詰まってしまった。

それを見透かしたように、理恵子はころころと軽やかに笑う。

『今日は休めばいいじゃない。その代わり、明日からは家族三人分がつつり稼いでくれないと。幸緒ちゃんのことをいつまでも悩んでいる暇はないわよ』

遅しい理恵子の台詞に、貴久は小さく苦笑を洩らした。

その通りだ。いつまでも戻らない過去を悔んでも仕方がない。六花も前を向いて歩き出した。ならば、自分も前に進んで行かなくてはいけないだろう。

「わかった、今から店に貼り紙だけして帰るよ」

『そうね。ついでに馬鹿従弟には連絡しなくていいわよ。店に行つてから気付けばいい気味だわ』

そこまで聞いて、理恵子が実は自分を気遣ってくれたのではなく、槇野に嫌がらせをしたいただけなのではないかと思えてしまった。

そんなことはないはずなのだが、あまりにも楽しそうな理恵子の様子に、思い過ごしとも思えない。

「おいおい、槇野の協力があつたからあの子も戻る気になつたんだらうっ。」

『協力つて、斎藤君達から借りたMDから曲移してCD・R焼いただけじゃない』

「もとはと言えば、榎野がおまえに電話してきたから、おまえも動く気になったんじゃないのか？」

『そんなんじゃないわよ。私はあの子に歌を辞めて欲しくなかっただけ。馬鹿に言われなくても、斎藤君に連絡するつもりはあったわ』
あくまでも榎野の功績は認めないつもりで理恵子に、貴久はどうとう反論を諦めた。

これ以上榎野の肩を持てば、間違いなく理恵子はへそを曲げてしまつたろう。そうなると、機嫌取りに大量の労力を要することは目に見えていた。

そういうことにしておくよと、会話に一区切りをつけようとした瞬間。

貴久の目の前を小さな白い欠片が横切った。

フロントガラスには、くしゃくしゃと皺の寄った一センチほどの花卉が転がっている。風に揺られて飛ばされた、街路樹のサルスベリの花だった。

また、風が吹くと、はらはらと幾つかの花が空を舞い、地に降り立つ。見れば、その辺りの道路はサルスベリの花びらで白く染まっていた。

まるで、淡雪が舞い降りたかのように。

「なあ、理恵子」

『なあに？』

「俺もあの子の歌、聴くことできると思うか？」

六花には強く言い聞かせたものとは打って変わった気弱な声に、貴久は自分自身で呆れてしまった。

もし、六花がユキを失えば、本当にもう二度と歌わなくなるだろう。

そうなってしまう可能性は、それなりの確率で 貴久が調べた限りでは四割ほども 存在した。

それは、一緒に調べてくれた理恵子もよくわかっていることだ
た。

けれど。

『当然じゃない』

何を馬鹿なことを、と言わんばかりの明快な返事が耳に心地よく
響いた。

『きつと、あの子たちの歌はこれから日本中に響いてくれるわよ』
ありがたいほど強く言い切ってくれる自分の妻に、貴久は悲観的
な己の心を遙か遠くへと蹴飛ばす。

彼女たちの絆の強さを信じてやろうと、想いを新たに塗り替える。
乾いた風が、また、祝福するように白い花を散らせた。

リノリウムの床を、一步、また一步とゆっくり歩みを進める。病室は、一年前と変わっていないかった。

軽く拳を作り、ドアをノックしようとして、わずかに躊躇う。

病室の中には、眠ったままのユキと、ユキの母親の晴恵がいるだろう。

晴恵は逃げ出した自分をどう思うだろうか。今更何をしにきたのだと、詰るのではないだろうか。

そう思うと、ドアをほんの数回叩くことが酷く怖かった。

それでも、ここまで来たからにはもう引き返せはしない。覚悟を決めて、緩みかけた拳をもう一度握った。

「リツちゃん？」

握った拳をドアにぶつける前に、驚きに震えた声が鼓膜を震わせた。

ゆっくりと、声の方向へと振り返る。

そこには、ヨシノとシユウが並んで立っていた。

どんな表情を作ればいいのかわからずにいると、駆け寄ってきたヨシノに力いっぱい抱き締められる。

「馬鹿っ！」

「……ヨシノ」

「リツちゃんの馬鹿！ めちゃくちゃ心配したんだからね！」

「ごめん」

返す言葉など、リツには思い浮かばなかった。ただ、謝罪を繰り返すことしかできず、ヨシノの言葉を素直に受け止める。

自分の気持ちを見失い、周りに心配をかけてしまったことは、本当に馬鹿と言われても当然のように思えた。

「謝らなくてもいいからさ、さっさとユキヒロに会ってこい」

ヨシノに抱き締められたままのリツの頭を、シユウはそう言いな

がらガシガシと乱暴に撫でる。

けれど、リツはそれにすぐさま頷くことができなかった。

ユキと会うことも怖い。けれど同時に、晴恵に会うのも怖いのだ。確かにリツが姿を消したきっかけは、晴恵にあった。

けれど、それだけでなく、この辛い状況から逃げ出したいという自分自身の弱さもあつたのだ。

晴恵は、今更自分がユキに会うことなど望んでいないのではないだろうか。否、それ以上に、ユキに会うことを許してはくれないのではないだろうか。

リツは、一度ユキを見捨てているのだから。

「何やってんの、リツちゃん！ ユツキーに会う為に戻ってきたんでしょ？ ほらー！」

「ヨ、ヨシノ……っ」

黙りこくってしまったリツだったが、ヨシノはさっさとドアを開け、病室の中に押し込んだ。

相変わらずの強引さは、心の準備などさせてはくれないようだ。

転びそうな体勢を何とか整えると、ベッド脇に置かれていた椅子から、人の立つ気配が伝わった。

晴恵、だ。

「六花ちゃん？」

「あ」

それ以上、声が出てこなかった。

伝えたいはずの言葉は喉の奥で詰まり、息苦しさばかり覚える。

晴恵の顔を直視することすらも出来なくて、ありつたけの想いを込めて頭を下げた。

今更ムシがいいことはわかっている。けれど、やはり許して欲しかったのだ。

「六花ちゃん、顔を上げて」

瘦せて節くれだった手が、静かに肩に置かれた。その手に軽く押されて、リツは恐る恐る頭を上げる。

目の前には、皺の目立つ目元に微かな雫を浮かべながら、それでも温かな笑みを浮かべた晴恵がいた。

「おば……ちゃ……」

「謝らないといけないのは、私の方だわ。本当にごめんなさい。貴女を追いつめるようなことを言ってしまった」

「そんなことない！ おばちゃんは昔から優しいもん！ あの時だつて私のことを考えてくれたから……！」

自分を責める晴恵の姿に、リツは慌てて否定した。その瞬間、それまで喉につかえて出てこなかった言葉が、堰を切ったように溢れ出す。

「おばちゃん、ごめんっ。私ばかり楽な方に逃げて、ユキのことも忘れようとして……。おばちゃんだつて辛いのに……」

伝えたい思いばかりが先走り、リツは上手く言葉を整理できなかった。ただ、思いついたまま声に変換していくだけ。

「無理だったのに……。私から約束したのに、それを投げ出して……。でも、やっぱり……。やっぱり、ユキの側にいたい。ユキと一緒に歌いたい」

何もかもを投げ出し、偽りに身を包んだけど、結局最終的に捨てることも誤魔化すことも出来なかったこと。

それは、『ユキの隣で歌うこと』、だった。

遠回りした結果、それがリツの見つけた真実。

「おばちゃん、私も一緒に、ユキを待つていい？」

いつも間にか溢れ出した涙が、リツの頬を濡らしていた。けれど、その濡れた瞳には、以前にはなかった強い意志が宿っている。

晴恵は、未だ目覚めずベッドに横たわる息子の姿に視線を向けた。

「いつ起きるか、わからないのよ」

「……うん。知ってる」

「このまま目が覚めないかもしれない」

母親として絶対にそうなつては欲しくない、口に出すのも厭いたくなる状況。

けれど同時に、それを考えずにはられない状況でもある。

リツ自身も嫌というほど感じていたし、つい数分前に別れた貴久の口からも出てきた言葉だった。

けれど、それでも。

「それでも、ユキがない生活より全然いいよ」

例え、目を開けてくれなくても、声を聴かせてくれなくても、手を伸ばせば触れられる場所にユキがいる。

触れれば、その肌にはまだ温もりが宿り、胸の奥には確かな鼓動を刻んでいるのだ。

それならやはり、ユキは『生きて』いる。

生きている限り、目を覚ます可能性だって残され続けるだろう。

「それに私、ユキと約束してるんだ。ユキは約束を破るような性格じゃないって、おばちゃんが一番知ってるでしょ？」

リツは精一杯の笑顔で、晴恵に問い掛けた。

強がりでもあり、自分に言い聞かせる為の言葉でもあったけれど、晴恵はただ静かに頷いてくれたのだった。

ユキの元に戻ったりリツは、かつてのように毎日病院へと通う日々を送っていた。

とはいえ、以前とは決定的に違う部分が幾つかあった。

一つは、新たに夕方から飲食店のアルバイトを始めたこと。

貴久としつかりと明確に話し合っていないが、『Anastasia』での仕事は辞めたことになっているだろう。

元の場所に戻ると決めた以上、逃げ道のような場所を残しておくわけにはいかない。

何より、いくら理恵子に理解があるとはいえ、やはり申し訳ない気持ちがあった。その上、近い将来貴久達には子供が生まれる。

これ以上、あの夫婦の邪魔をしてはいけなれないと思えた。

だから、あの店に戻るわけにはいかなかった。

そうならば当然、生活の糧が無くなるわけで、それを稼ぐためにアルバイトを始めるのは当然の流れだった。

昼間は病院で晴恵とともにユキの看護にあたり、夕方になるとそのまま出勤する。日付が変わる頃に仕事を終えて自分のマンションに戻り、翌朝また病院へ向かう。

悲嘆に暮れ、病院と自室の往復をまるで拷問のように繰り返していた頃に比べると、前向きで健康的な生活になっていた。

その所為か、ヨシノからも「前よりずっと顔色が良い」と褒められたりもした。

二つ目は、アルバイトのない日に、かつて世話になっていたボイストレーニングスタジオにまた通い始めたことだ。

プロとしての仕事を始めた時、須藤からも勧められてレッスンを受けるようになっていた。しかし、ユキの事故の後からは一切行っていない。

担当してくれていたインストラクターは、須藤からバンドの状況を聞いていたらしく、思いのほか快くレッスンを引き受けてくれたのが救いだった。もちろん、口添えしてくれた須藤の人望もあつただろう。

いつ、もう一度ユキのギターで歌えるようになるのかはわからない。

けれどリツは、ユキが目覚めた時にいつでも歌えるようにしておきたかった。

ユキに歌ってと望まれた時、みっともなく掠れた声など聞かせてしまつわけにはいかないのだ。

本格的に声を出すことは久しぶりで、再開当初は声の出なさに落ち込みそうにはなったが、同時に歌う心地良さを思い出すことができた。

以前ほど悲観的にならずに済んだのは、トレーニングのお陰もあつただろう。

そして、最後に。

リツは、毎日ユキに話しかけ続けた。

それは特別珍しい光景ではなく、また難しいことでもなかったけれど、かつては途中から挫折した行為であった。

いくら話しかけても、ユキからの答えが返らない。その事実が日を追うごとに息苦しさで諦めを呼び寄せ、少しずつ話しかける言葉が減り、やがてほとんど何も言わず、ただユキの寝顔を見つめて溜め息をつくばかりになってしまったのだ。

けれど、今は違う。

返事がないのは変わらないが、リツは毎日色んな話をし続けた。

レッスンのこと、アルバイトのこと、それ以外にも自分の見たこと聞いたこと……。

いつも並んで歩いていた時のように、とりとめもなく語り続け、時には質問を投げかけた。

そんな日々は無情にも瞬く間に過ぎていく。

数か月過ぎても、ユキの容体は良くも悪くも変わらなかった。

「今日は冷えるわね」

ユキの傍らで編み物をしながら晴恵が呟いた。

病室から見える空は、寒々しい灰色の雲で覆われていて、太陽の光を遮っている。木々を揺らす風がカタカタと窓を鳴らしていった。

もう、すっかり冬模様だ。

「うん。天気予報見てたら、雪降るかもって言ってたよ」

「私も見たわ。でも、こっちは白峰ほど降らないでしょうね」

「白峰と比べちゃ駄目だよ、おばちゃん。シユウに写メ見せたら、

『豪雪地帯じゃん』って言われたんだから」

二本の編み針を使って着々と編み上げていく晴恵の手元をぼんやりと眺めながら、リツは肩を竦めて笑う。つられるように晴恵は微笑むと、一旦手を止めて紙袋に編みかけのものを戻し、立ち上がった。

「それでも昔に比べたら、随分と降らなくなっただけだね。あら、

ポットのお湯がもう無かったわ」

「あ、じゃあ私が」

そう言ってリツが席を立とうとする前に、晴恵は「いいわよ」と素早く制した。

「今日はレッスンの日でしょ？ 行くまでのんびりしてなさい」

言葉は穏やかだったが、有無を言わせぬ空気をまとって晴恵はそう言い残すと、さっさとポットを持って病室を出ていってしまふ。

どうやら、最近の仕事のシフトがキツイことを気遣ってくれたらしい。

連日のアルバイトと病院通いに加え、休みの日にはレッスンを入れているリツにとって、正直なところ、休息が不足していた。昨日も常より客数が多く、定時よりも一時間近く遅れての退勤となっていたのだ。

それでも、毎日面会できる時間を目一杯使って病院には来たかった。ほんの数分でも長く、ユキの傍にいられることをリツは選んでいた。

その結果、当然削られるのは睡眠時間となる。

今も、ほんの少し気を抜くと、目蓋が落ちてきそうになっていた。

「ユキー、めっちゃくちゃ眠いよー」

椅子に座ったまま、ぼふっとベッドに頭を預ける。そんな体勢になると、尚更眠気が増したように感じた。

「あー、今三秒で寝れそう。ポイトレ中に立ったまま寝るかもー」
既に目蓋は下がり切り、閉ざされた視界の奥でユキが笑った気がした。

『リツは電車でも立ったまま寝てたもんね』

そんな風に、少しからかうような声まで聞こえてきそうだった。

もちろん、そんなはずはないけれど、ほんの一瞬垣間見た夢の中で、懐かしい笑い声を聞いた気がして。

刹那、空気を裂く激しい音に、リツは飛び起きた。

部屋にはまだ晴恵は戻ってきていない。意識がとんでいたのは、

わずか数分のことだったようだ。

「びっ……くりしたあー」

音の正体は、どうやら雷のようだった。その証拠に、今もまた低い唸り声のような音が響き、時折稲光が走る。雲の色は更に暗さを増していた。

窓辺に寄ると、リツの目の前をひらり。

白い欠片が横切った。

「あ、ホントに降ってきた。ユキ、雪だよ。初雪」

そう言いながら、いつかのグラウンドのようにユキへと振り返る。

ユキは、穏やかな表情のまま、静かに眠っていた。

「……あのさ、ユキ。私ね、あの歌詞ちよつと書き直したんだ」

構わずリツは話し始めた。目の前のユキが、まるで聞いていてくれるかのように。

「あの時と今とじゃ、また気持ちが違うから。とか言っても、最初の歌詞はユキにもまだ教えてなかったんだし、比較できないだろうけどさ」

ユキの代わりに、窓ガラスを鳴らす風が相槌を打つ。頼りない薄片は数を増やし、外界を白銀に染め始めていた。

この冬最初の雪を見つめながら、リツは約束の歌に想いを馳せる。

「こんな日に、ぴったりの歌になったと思うんだ」

ゆるやかに、ひそやかに、世界を塗り替えていく白い雪。

そんな風に気付かぬうちに、自分の世界はユキの色に染まっていたのだ。

音で。声で。その全てで。

その想いが、歌となって零れ出す。

リツの澄んだ歌声が、病室内に拡がった。

「ちゃんと気持ちを伝えたら、びっくりしてユキ君も目を覚ますかもな」

歌いながら、貴久が励ますように放った言葉を思い出す。

リツにしてみれば、この歌がユキに対する告白と同意だ。

もし、この歌がきつかけで目を覚ましたら。 。
そんな夢物語のような奇跡を、ほんの一瞬期待した。
けれど。

「……はい、ここまで」

自分自身でリツは曲を打ち切り、宣言する。

「聞こえてるかどうかわからないから、起きてから最後まで聴かせるね。ってことで、聴きたかったらさっさと起きるよ、ユキ」

眠ったままのユキの額に軽くデコピンをくらわせ、リツは挑発するように笑った。

同時に、都合のいいことを考えてしまった自分に苦笑する。

お伽話のように簡単にはいかないのが現実だ。

「さてと、おばちゃん遅いな。もしかして、また看護婦さんに捉まってるのかな？」

晴恵は人が良い所為か、話し好きの中年看護師によく捉まっていた。今日もその口だろうと思い、話を途中で辞退できない晴恵を救いだそうとリツはドアへと向かった。

その一瞬、視界の端に何か動くものがあつた気がした。

反射的に振り返り、動いたと思われる辺りに目を向ける。

そこにあつたのは、ユキの左手だった。けれど、力なく投げ出されたその手は、ピクリともしていない。

「錯覚、か」

お伽話とは違うと思った直後に、期待を捨て切れていない自分が少しばかり恨めしい。

焦っても仕方がないんだからと自らに言い聞かせ、病室を出ようとドアの取っ手に手を掛けた。

スライド式のドアは、通常より軽い力であっけなく動いた。片手にポットを下げた晴恵が目の前にいる。偶然にも、二人同時にドアを開いたらしい。

「あ、おばちゃん、今迎えに行こうと思ってたんだ」

「ごめんなさい。また捉まっちゃったわ」

恥ずかしそうに笑う晴恵を奥へと通し、リツはドアをゆっくりと元に戻す。

背後で、晴恵がポットをセツトする音が聞こえ、その後、

「雪央？」

短い呼び掛けが聞こえた。

いつもと違う声の調子に、リツは慌てて二人の側へと駆け寄る。

ユキを覗き込むように見つめる晴恵が、震えた声を洩らした。

「雪央、あなた……」

うつすらと、けれど、確実に、長きに亘って閉ざされ続けた瞳が開いていた。

「ユキ……！」

「雪央、わかる？ お母さんよ！ 六花ちゃんもいるのよ！」

晴恵の必死の問い掛けに応えようとしたのか、ユキの唇が微かに動く。けれど、それは声にはならず、微かな吐息が洩れただけだった。

それでも、何かを伝えようとユキの口はゆっくりと動き続けた。

視線も、確実に晴恵とリツを捉えていた。

「私、先生呼んできます！」

ユキに呼びかけ続ける晴恵を置いて、リツは病室を飛び出した。

「走らないで下さい」と注意を投げかけてきた看護師をそのまま強引に捕まえ、溢れ出しそうな涙を必死の思いで堪えて告げる。

「ユキが……、律野君が、目を覚ましました。先生、呼んで下さい！」

驚き目を見開く看護師だったが、すぐさま我に戻ると「わかりました」と急ぎ足に踵を返す。

リツはそのまましばらくその場に座り込み、生まれて初めて、信じてもない神様に感謝の言葉を捧げたのだった。

「聞こえてたよ、ずっと」

以前と同じように話すことが出来るようになったユキは、リツと二人きりになった瞬間、突然そんな告白をした。

リツは何のことかわからずに、不思議顔で首を傾げる。

「聴こえてたって、何が？」

「全部。リツ達の会話も、話しかけてくれる言葉も、それから、歌も」

「え？」

リツはユキではないから、確認のしようがないし、嘘だと否定も出来ない。

けれど、ずっと眠り続けていたのに、全てが聴こえていたなどとは、にわかには信じられなかった。

「全部聴こえて、リツや母さんが辛そうなのもわかって、でも身体は何一つ言うことを利いてくれなかったから、もどかしかった」

「ユキ……」

もし本当にユキの言った通りなら、一番辛かったのはユキ自身だったのかもしれない。

ユキには耳を塞ぐことも、リツのように逃げ出すこともできなかったのだから。

そして思うのは、病室に来なくなったリツをどんな風に思ってたのか。それを考えると、リツは自分の罪深さを改めて感じてしまう。

「……それで、続きは？」

「続きって？」

「『Song for Snow』の。目が覚めてからって言うてただろう？ ついでに言うと、動けない人間にデコピンはどうかと思うよ」

結構痛かったんだから、と少し拗ねたように抗議するユキに、リツは思わず顔を覆った。そのまま、ユキの横たわるベッドに突っ伏してしまふ。

「リツ？」

「ホントに……聴こえてたんだ」

「そうだって言ったでしょ」

「すっげえ、恥ずかしい」

そう言ったリツの声は、微かに震えていた。

それはもちろん、恥ずかしさからではなく。

簡単に逃げ出した自分の不甲斐なさに対する怒りとあさましさ。

そして、そんな情けない自分の歌をちゃんと聴き、何も言わず許してくれているユキへの感謝と愛しさ。その他様々な感情がない交ぜになり、涙となって溢れ出した。

そんなリツに気付いているのかいないのか、ユキは素知らぬ顔で話を続ける。

「お陰様で、今俺の頭ん中は『Song for Snow』のアレンジと新曲の構想でグルグルだから。ちゃんと責任とってよ、リツ」

まるでリツが歌ったことが問題だったとでも言うようなユキの口振りに、「他人の所為にして」と心の中でだけ苦情を言う。けれどそれは決して本気の不満ではなく、くすぐったさを感じるような甘さが含まれていた。

そのまま、リツはしばし考え込み、気付かれないように涙を拭くと、ゆっくりと顔を上げた。

未だ横たわったままのユキを真っ直ぐに見つめる。

「……いいよ。一生かかるかもしれないけどね」

プロポーズ紛いの台詞に、珍しくユキが面食らったような表情を見せた。

けれど、それはゆっくりとほどけると、幸せそうな微笑みへと変化した。

「ああ、いいね、それ。一生かけてもらおう。手始めに、最後まで歌ってもらおうかな」

見つめ合う互いの顔には、もう、共にあることのできる喜びしかなかった。

リツは座っていた椅子から立ち上がると、姿勢を正す。

そつと瞳を閉じると、耳の奥には鮮やかに蘇る旋律があった。

風に鳴る窓の音をカウント代わりに、リツの心に寄り添うギターの音色が溢れ出す。

ゆったりと空気を胸に招き入れると、取り戻したばかりの大切な人への想いを、一つ一つ確かめるように紡ぎ始めた。

#17 Song for Snow (後書き)

ここまでお読み頂き、ありがとうございます。

この作品は2010年11月末に完結した作品ではありますが、書き始めたのはそれよりも5年近く前だったりします。

一度完結させたものでしたが、あまりにも自分で納得がいかなくて、大幅改訂し、昨年ようやく自分の納得できる形に納めることが出来ました

因みに、中編と呼べる長さで初めて完結させた物語でもありません。その為、人気どころ関係なくとても愛着のある作品です。

「面白い」と言えるような作品ではないかもしれませんが、少しでも何か感じて頂ければ嬉しく思います。

それでは、本当にありがとうございました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3645z/>

Song for Snow

2011年12月24日09時50分発行